

## 二宮尊徳の倫理思想 — 天道と人道 —

梶 田 信 吾

	目	次	
序言	21	(1) 悟道と空	32
本論 (一) 偉人と環境	22	(2) 悟道と人道	33
天 (二) 天道界	22	(3) 迷と人道	33
(1) 天地の経文	22	(4) 天の分身としての我	33
(2) 天災と天恵	23	(5) 我身の元としての天に報いる	34
(3) 仏教、儒教を学ぶ	24	(6) 徳と恩	34
(4) 肉眼と心眼	24	(五) 報徳教	35
(5) 一元太極界	25	(1) 物徳開発と報徳溯源	35
(6) 太極の不止不転 不生不滅	25	(2) 天祿と分度	36
1. 空、一、色	26	(3) 勤勞	37
2. 無始無終	26	(4) 開闢元始道	37
3. 不止不転	26	(5) 推讓	38
4. 不増不減	27	(六) 日常的世界の倫理	39
地 (三) 意識界	28	(1) 男女の道	39
(1) 意識と存在	28	(2) 親子の道	40
(2) 一円仁、一円空	29	(3) 世渡りの道	40
(3) 身体我と人道	29	(4) 士道論	40
(4) 相對対立開闢の原理としての 身体我	30	(5) 職分論	40
(5) 「天道の自然」と「人道の 自然」	31	(6) 富貴	41
人 (四) 人倫界	32	(7) 農本論	41
		(8) 荒蕪開発の道	41
		(七) 結び	41

序言 本研究紀要のテーマに「二宮尊徳の倫理思想—天道と人道」を選ぶに至った動機については次の三つがある。第一は昨年の研究テーマとして「シユヴァイツァーの生命への畏敬の倫理」を選び、彼の思想を纏めてみると試みたが、彼が「善とは生を保ち、生を促がし発展しうべき生をその最高の価値に迄達せしめる事である」という考え、及人生観、生活態度が我が国では彼より百年程早く二宮尊徳によつて利他即利己として体得せられ、衆人の生活の中に一円全体主義の報徳思想として普及した事と相通ずる処ありと考えるに至つた事である。

勿論尊徳はシユヴァイツァー程に恵まれた環境の中に学問に没頭出来、社会的に思いの儘に活動も許されたのではないが、学問を人生に役立つ実学として生かす為の真剣な学問をしたとも云えるのであつて、各時代の思想家が先人の思想に人生の道を探つた様に、そして当時の思想を批判しつゝよく摂取し独自の思想体系を樹立

した様に、尊徳自身も一家再興から農村復興の活動の中に経済即道徳の経済倫理を確立させて行つたのであつてそれ故にシユヴァイツァー以上にその構想力大と評価してもよいのではないかと思う。

之を西洋哲学や学問の方法を以てすれば東洋の儒学的教養や仏教的教養による彼の考究方法は劣る様に思われるが、しかしシユヴァイツァー自身も過去の西洋哲学を批判し、彼の信仰するキリスト教による啓示により、キリストに自己を捧げ、キリスト我が中にある神秘的感情の中に、自然世界と一体化する神秘主義に立つている点に於て、謂わゞ東洋的思考方によつているとも考えられるのである。かくて筆者にとつてシユヴァイツァーと尊徳はその思想なり生活態度に於て極めて共通した点を多く持つてゐると思われる故に、亦両者とも人類を導く偉人と痛感される故に、この両者を結びつけて考える事により、現在を生き抜く決意と態度を学びたいと切に思つた次第である。

第二の動機としてはかく尊徳の思想と類似していると感ずるに至つたのも、既に二十年を経過せんとする学生時代に辿つた倫理探求の道に於て尊徳の思想の一片に触れたものを、本研究に於て貧弱な青年時代の所産に手を加えつゝ、も一度現代に生きる倫理、それも大衆の倫理、平易で単純な倫理を自己のものと思つたからである。

第三の動機としては二宮尊徳の思想も全集やその他の単行本により相当弘まつているものの、私見によると尊徳は昔の修身の教科書に出てくる少年時代の勤儉力行の権化としての尊徳であり、天の理に則り人道に誠をつくし生き抜く、そして衆人と共に生き、先を歩いた思想家、実践家たる事が案外知られてないのではないかと愚考する故に、この小篇の発表により些かでも二宮尊徳の再認識をされ、その思想に興味を抱かれて彼の著作を読んで貰えたらと念願するからである。

## 本 論

### (一) 偉人と環境

二宮尊徳は1787年徳川家斉が11代将軍となり、松平定信者中筆頭となつた年、相模国足柄上郡桜井村栢山(今の神奈川県)に生まれた。時代は田沼意次時代の積極財政の破綻から天明の大飢饉奥羽より全国に及び、奥州では死者十万を出し、江戸は大火、亦開府以来の関東大水害あり、米価騰貴し江戸大阪の町人等騒乱し所謂天明の打ちこわしが始まり、外からはロシア人蝦夷地に來たり松前藩に通商を要求し、内外共に天下を揺がし始めた頃であつた。茲に定信の儉約令、棄捐令、七分積立金制、人足寄場等の緊縮政策による財政建直しも、北辺よりの度重なる来航と、内には農民の一揆依然として続き、失意のうちに定信93年老中職を退く頃は、関東にては大暴風雨による洪水のため数村流亡し、彼の家の田畑殆んど荒地となり、漸く回復開墾を始めた6歳の時であつた。

(2) 彼の奮闘の生涯は彼の家、藩、国、対外関係すべて苦難の生活の中から天道、人道の道を学びつゝ、衆人と共に生き抜く道を歩き続けたのである。この点シユヴァイツァーが牧師の家に育ち、世人から坊ちやんとして大事にされ可愛がられつゝ、親の理解ある寛容と厳しい躰けの中に、社会の指導者階級としての教養を身につけ、教育を受けえたのとは大いに違ふ処であるが、しかし彼の内部に芽生えた思いやりの心は、牧師の家に育つた故に尙一層燃え立ち「幸福の中に他人の不幸を憐れみ、彼等に同情し憐み労わる事を忘れず」遂に30歳になつたら医者になり、アフリカの黒人救済に当る事を欧州全体の、それ故国民の一人として責務として決意するに至つたの(4)

は、環境は異なれど、内から汲みとるものは世界の良心として人類共通の方向に決然として立ち、同じく奮闘の生涯を続けるのである。

かく後者は社会の上層から一般大衆の救済の為大衆の位置迄降り、大衆と共に生き抜く型であり、釈迦や親鸞道元等の宗教界の偉人や18~9世紀における革命や社会主義運動に身を投じた貴族達もこの型に属する。之に対し下層社会から艱難苦勞しつゝ、世人の救済解放につくす人々も又多いのであつて、中間の階層の人々は、一般に中途半端であつてよき刺戟も受けず、為に社会に乗出しえないのではあるまいか。かかる意味からする時一般教育論に於て、余りに与えすぎ恵まれた環境はよく之を利用し学んで行く決意努力が伴わなければ、社会の発展に寄与する処少く、与えるものより失うもの多いという傾向に陥り易いと感じさせられるのである。

以上に於て尊徳の誕生と幼年時の社会環境を一瞥したのであるが、次に彼の奮闘の生涯の精神的根柢たる思想がいかにして成立したかに触れつゝ、彼の思想の内容主に天道と人道について述べる事とする。(5)

## 天 (⇒) 天道界

### (1) 天地の経文——即物主義

尊徳が人間は何をなすべきであるか、誠の道は何処にあるかについて考えつくに至つたのは、先人に教を受けたり、書籍から学びえたものでなく、彼の誕生地である栢山における自然からであつた。この事は彼の思想を思想史上ユニークのものとするものである。折衷学派とか独立学派とするのもその故である。

二宮翁夜話によると彼は人間の道の基準を「地球の測量」から思い及ぼして、先ず「万古動かぬ自然の理、しかも言ひわず而して四時行われる万物成る処の不尽の…<sup>(6)</sup>…不言の…<sup>(7)</sup>…万古不易の道理により…日々繰返し示さる天地の経文に誠の道は明らかなり」とする。「何故なれば天地自然の世界は寒往けば暑來り、暑往けば寒來るといふ風に寒暑往來し、「定規に従い運轉し、幾回運轉するも定規に外れず廻り合する」ものであり、例えば「米を蒔けば米が蒔え、<sup>(8)</sup>麦を蒔けば麦の実るは万古不易」であり、又「樂たる堤は時々刻々に崩れ、堀たる堀は日々刻々に埋まる。葦たる屋根は日々夜々に腐る。是即天理の常。天理に任する時は皆荒地となりて開闢の昔に歸るが自然の道」である。それは因果応報の理に基き<sup>(9)</sup>万古不易であるから天地の真理たる事「弁を待たずして明なり」であるが、人間の道も真理たる為には、この<sup>(10)</sup>万古不易の自然の道に随順せざれば生きる事をえぬのであるから、天地を経文として人道を立てねばならないのは当然である。それ故に彼は「天地の経文に引当て、<sup>(11)</sup>違ひなき物を取て、<sup>(12)</sup>違へるは取らず、地球も日輪も散乱する迄は決して違ひなき道」に則るを真理とする。

亦「大道は譬ば水の如く善く世の中を潤沢して滞らざる物」でなければならぬとする。それは「天地は一物なれば至道二つあらず、至理は万国同じかるべき」<sup>(13)</sup> 普遍性がなければあらゆる処に通用しえないからである。かく「世界万般皆同じく一理なり」<sup>(14)</sup> で万物その呼称は異なれど、それらの属性に多少違いはあるとしてもその本性異なる事なければ、各々の変化発展の理は異ならず、普遍的相を根底に持つ故に「予一草を以て万理を（生、滅、変化発展の理を万物に滞らずみる故に）究む」事が出来るというのである。一をきいて十を悟り、一事が万事という如く類推して行く。<sup>(15)</sup>

彼がかく自然の現象から人間の道たる経文を見出さんとした事は、ゲーテやシュヴアイツァーの自然に親しみ観察し、自然から終始学ぶ態度をとつたのと相通ずる処あり、シュヴアイツァーがアフリカにおいて河を舟航している中に河馬の大群を見て、凡そ生きとし生けるものの中に生命をみ、生命への畏敬こそ倫理の根本であると悟つた様に、彼も亦一草の姿からその伸びゆく力をみ、その過去から現在、未来への輪廻の中に、人間のなすべき勤め、誠の道を見出したのである。<sup>(16)</sup>

## (2) 天災と天恵一積小爲大の勤勞

尊徳は誠の道をどのように具体的に悟つたか。彼の成長の記録により記す事とする。彼の6歳の時見舞われた郷里の酒匂川の氾濫による四方の缺潰の為、之迄四時温和嚴冬雪稀にして「常に勤勞する者の為に相当の報酬の与えられていた処に百年に一度の転倒を生ぜしめ茲に必ず旋転輪廻し来る天災の順序を察し、天災に備え人禍を防ぐ生活様式を考察するに至つた」と考えられるのである。更に彼11歳の時父病み、父に代りて酒匂川堤防工事の夫役に出で、一家を養い父の病を看護したるも空しく、3年後の14歳の時父をなくし、晨起薪を伐り深更迄草鞋を作り一族四人の生計を立てるのであるが、困苦窮まり負債償却の為田地を売り、正月大神樂来るも金なき為戸を閉ちて畝守を遣うといった悲惨な状況であつた。そして2年後の16歳の時遂に母も歿し、茲に一家離散親戚の家に預けられる身となつたのである。<sup>(17)</sup>

然し乍らかかる貧苦悲惨の中にあり乍ら、終日働らく中に聖賢の学に志し、採薪の途次大学を繙き刻苦勉勵を続けた。彼が16歳の時再び襲つた洪水により田畑流失し、彼の所有の地所も剩す処なくなつたのであるが、その洪水で用水堀流失し堀筋変化し不用の地となつた処を開墾し、邑民の棄苗を拾い集めて植付けた処、幸にして米一俵余の実りをえた。

又彼が家を復興する為工夫し夜業を終えてから読書に励んだが、伯父之を禁ずるので、油菜を作つて読めば小言もなからんと思ひ、友人の家から油菜の種を借り、所

有地の埤に之を植えた処、五勺の油菜から六、七升の菜種を得たのである。彼が17歳の時である。

かかる経験から総ての花実はその種子よりその量を増し、洪水後の河原にさえ草は生え且成長する。茲に彼は次の事を発見した。そして之彼の思想発展の出発点となつたものである。「凡そ小を積て大を致すは自然の道也。是を以て父祖の家を興し、祖先の霊を安んぜん事必せり」と。即ち何事も塵も積もれば山となる如く、家の復興も、自然の恵をよく人間が利用して精を出し之を蓄積すればなると、極めて平凡と思われる事を自らの勤勞で体験したのである。キリストの言葉に「心の貪しき者は幸いなり。その人は神をみん。……求めよ。さらば与えられん」とあるが、貪しきが故に道を求める事切なる人には、艱難汝を玉にし、真理を発見させるものである。かくてこの艱難は外から与えられて、強固な意志が的確なる状況判断の下に、自己を完成させるものとして自己の中にとり入れ、一家の繁栄を生ぜしめたものである。「憂き事の尙この上に積れかし、限りある身の力ためさん」の態度と云える。天災にも挫けず之を自己を鍛える天恵と考える態度である。然し乍らこの災難も直接自分の身にふりかゝるものでなく、他人社会のそれであつても、猶内なる良心に於て「幸福を権利として受けとりえず、絶えず世の不幸を自己の艱難として迎え、眞の自己を見出さんとして、外なるものを自己の中にとり入れ、自己を完成させ内心の幸福をえた」シュヴアイツァーの如き受けとり方もある。<sup>(18)</sup>

吾人は現在如何に生くべきか、複雑な社会機構の力に押されて、自覚反省なき組織人としての生活は、社会を動かす個人の努力を忘れる事により、自己を退歩させ社会を沈滞させるものである。殊に現在のレジャーへの憧れが安易な道を選ばさせ、以て他を傷け他の幸福を度外視して無神経に陥らしめているのではなからうか。

さて尊徳は生物の成育に於て小が大となるをみたが、すべての生物に於て天は之に恵を与え「蒔米種、生米穂、発米花、結米実。蒔麦種、生麦穂、発麦花、結麦実。……」と無数の植物の例をあげて、それらも人間の努力によつて、天は恵を与えて生活は成り立つという人生観を得て喜んだのである。この体験に基づき彼の48才の時の処女作である三才報徳金毛録中の因果之解(前述20)や「米まけば米の草はえ米の花、開きて米の実る世の中」等の数百の道歌となつて四方に伝播したのである。<sup>(19)</sup>

かく積小致大の勤勞こそ彼の報徳教の三大柱の一つとなるものである。

かくて彼の教えはすべて自然界の運行、万物の発育から経文を見出し、農民に縷々として繰返し徹底させ、以て人道の妙を悟得させんとするのであるが、その点極め

て即物主義的であり、又天地の運行から学ぶ故に、天地と共に行われて変らぬ万古不易といいうるのである。

### (3) 仏教、儒教を学ぶ

然らば天地の経文に示される天道とは何であるか。所謂天道界について述べる事にする。彼は「夫天地間の万物眼に見ゆる物を色といい、眼に見えざる物を空という。空といえは何も無きが如く思えども既に気あり。」とか「思慮の及ぶを太極と云い、思慮の及ばざる<sup>(22)</sup>を無極と云い、<sup>(23)</sup>と語るように仏教や儒教の概念、用語で説明する。処で彼はどのようにして仏教や儒教を学んだのであろうか。彼が貧苦の中で聖賢の学<sup>(24)</sup>に志し大学を読んだ事は前述した。そしてこの志は一家再興の決意をした後益々進み、18歳から19歳の頃は勤勞の合間に、名主の家での儒者の講義をききに行つたり、又旅僧の読経にきき入り、その経の有難さに感激して再読を乞ひ、観音經の功德廣大無量なるを悟つたという。研鑽はその後も続き、彼26歳になつた時学習に専念したい為遂に小田原藩の閥家の眼道家の皆党となり「読書の傍に坐し之をきいて倦まず、遂に四書に通じ能く之を暗記し、又眼部の三子往学の僕となり、講堂の窓下に立ち窓かに講義をきく略文義に通ず<sup>(25)</sup>」とは門弟福住正兄の伝えるところである。かく彼は当時の武士の子弟が一応学ぶ儒教については農民としては特別進んだ教育を受けたものと解する事が出来る。しかし彼の之迄の苦しい生活の体験からいかにして己の生活を向上させ一家を再建するかの問題意識から聖賢の道を学ぶ者としては、支配階級としての武士の子弟が単に教養をつけるためのものであつたに比し心構えの上に雲泥の違いがあつたろう事は、同じく門弟の斎藤高行の伝える二宮翁語録により知る事が出来よう即ち「余少年の頃四書を読み、以て之を儒者の行う処に徹し甚だその齟齬するのを疑つた。窓かに思うには巻中必ず道に乖くの語あるならん、もしそれ一字一句道に乖くの語があるのなら、即ち將に天下の書籍をあげ、以てその雜を削り、その粹を存しよう<sup>(26)</sup>と欲した。故に削る為錐を執つて以て之を読む、終篇金科玉条遂に一個の錐を下す事が出来なかつた。(中略) 処が野州桜町四千石の廢邑を治むるに及んで独り之を四書の学辨論語に問い、遂に以て功を奏する事が出来た」とある。儒者の説く理性的規範的事理がどのように現実に実行実現されるかを四書の思想を以て現実なるものを解釈し、彼の演繹帰納の方法を以て、所謂野州桜町の治国の策として寸分も違はず適用される事を理解したといふのである。桜町の自然に於て天地の経文を四書により求めたのである。

### (4) 肉眼と心眼

彼のかかる真劍周到なる求学態度は所謂「肉眼を以て一度(現実を)見渡して後肉眼を閉じ(理性の構想力による善遍化の作用)心眼を開きて(現実を)能見る」という方法をとつたのである。下程勇吉氏のいう「有限に即して無限を思索し、相對に即して絶対を構想せるもの<sup>(27)</sup>」の心眼とは肉眼を基底とし、現在の一点に立ちて過去現在未来を一眸の裡に包む全円の統一を現前化する思惟能力<sup>(28)</sup>であり、正にこの心眼こそ自然界並に人間界の認識主体となるもので、翁の云う天道界も之あるによつて知られ、その意味で心眼は天道の認識根拠と云われるものである。尊徳は「天地の真理は不書の経文にあらざれば見えざる物なり。……心眼を開きて能見る時、如何なる微細の理も見えざる事なし。肉眼の見る処は限あり。心眼の見る処は限なければなり」となし「思慮及ばざる無極も無と云うべからず。我眼力の及ばざるのみ<sup>(29)</sup>」であり、心眼によつて、未来も天地の運行から知る事が出来るとなすのである。その点彼の心眼は「不書の経則物云ずして四時行れ百物なる処の天地の経文に引当て違ひなき物を取て、違へるは取らず。故に予が(心眼により)説く処は、日輪に光明ある内は行れざる事なく、決して違ひ事なき<sup>(30)</sup>」認識主体なりと断言するのである。

この自然に就ての見解は同じく自然を嚴肅なものとして畏敬し、自然から学ぶ態度をとつた西洋のゲーテや、之に敬服したシュヴァイツァーの態度とは異なる処がある。尊徳は儒教のいう天何をか云はん、四時行れ万物なる処に天地の経文を見出し、天に則する即物主義の立場に立ち、後述する如く天は善にも与せず、悪にも与せぬものとして之を利用する人間として天道の自然に対し人道の自然を只一人高天原にたつ開關の氣持で向おうとする。シュヴァイツァーのいう能動的自己完成の肯定的樂天的倫理を説くとも考えられ、自然解釈においても暗い<sup>(31)</sup>処なく、東洋的な敬天隨順的である。之に対し西洋のキリスト教の立場に立つシュヴァイツァーは「自然は驚く程創造的であり、同時に無意味な破壊する力である。途方に暮れて我々は自然に対するとか、又世界は自己矛盾している生活意志の演ずる訳の分らぬ見世物の觀を呈して居り、世界は壯麗であり乍ら恐怖すべきものであり無慈悲なものである。喜びであり乍ら苦しみである」となし、神の創れる天地も同じ被造物たる人間に対しては苦しみを与えるもの、恐怖すべきものとして、世界生起の現象に悲觀的であり、東洋的な即物主義の肯定に対し、對立的否定的態度をとり、印度の受動的悲觀的倫理に類似する立場に立つ。しかし彼はキリストの贖罪の十字架に已れもつく事により、自然を恐怖すべきもの、苦しみを与えるものとする己れを否定し、世界生起の現象をその儘うべなう諦念の下に、己れを生への宇宙的意志のう

ちに捉え、否定の否定としてのより深められた世界人生肯定へと進むのである。

勿論両者とも人生における実践に於ては、已れを否定し、献身の道を尊徳のいう人道の自然を行ずる点に変わりはないのであるが、只自然に対して東洋西洋の違いが現われていると云えるのである。

#### (5) 尊徳の自然観——一元太極界

さて次に尊徳が天地の経文として見出した天道界を、人道の倫理にいかんが則らせて行つたかを知る上から詳細に述べねばならぬ。茲に彼の48歳の時の処女作三才報徳金毛録、それは彼の自然観のみならず人生観の根本をなすものとされる故に之により探る事とする。

金毛録は太極之図、一元之論図、一元体之論図、一元氣之論図、五行分配之図、陰陽生剖之図という風にして書きはじめ、天命生死來往之図、五常配当之図と発展させ、宇宙の根元である太極から天地の成立ち、万物の発生と生死を示し、進んで人間界の人倫五常を図で示し、更に解に於て男女五倫之解から一心治乱之解、国家安寧豊饒之解、財宝増減、田徳、田器修補之解という風に具体的に万民の勤むべき道にして万人勤めて可なる勸農之道を説きすゝめ、最後に報徳訓、忠信解、因果輪廻之解に於て彼の立つ報徳溯源の道を明らかにしたものであり彼の思想の根幹をなすものである。

同書中の太極、氣體、陰陽、天命、五常等の概念は四書の考究により道を説いた朱子の太極図説の影響を少からず受けていると下程教授は述べられているが、之尊徳が当時の儒学を学んだ結果、天地の運行から人道を明らかにする為にとり入れたものである。

太極之図に「万物の化生は太極を以て元となさざるといふことなし」亦太極之解に於て「夫れ本は一円太極なり、太極は既に一元となる。……人力を以て觀察するも及ばざるなり。唯一を一と發け、元を元と号けるのみ。之を太極と謂う」と万物の元を措定して儒教でいう太極という言葉を使い、太極から演繹的に一元之論図、一元体之論図、一元氣之論図に於て水火風地、清濁氣體、陰陽暑寒は皆無きにあらず、有るにあらずとなし、茲に火空、地空等、空という字を図に入れ、地水火風各々はあるといふのもなく、それかといつて無いといふのもない、混沌たる一円全体の中から相對對立の相が生まれてくるのであり「夫れ元は一円混沌となり、混沌亦復清濁と為る。猶清濁は空液の如し。空液動きて自然に清濁を剖つ。清濁二物を成す時は則ち体有り。……体氣の本を悟れば混沌に歸す。混沌變化して万體となる。万體の本を推せば一體に歸す……之を天理自然と云う」(一元體氣之解)と万體の本は混沌に歸するも、それから万體現われる故に一元的に之を太極と名づけたに過ぎない

というのである。

かく混沌たる全体こそ絶対の存在であり、その展開化生變化により万物名づけられる相對對立の日常の世界が現われるのである。この事は更に「大円鏡」に於ても金毛録にあるのと大体同様宇宙の始めから事物が開闢する順序を明らかにし、人事万般、勤行、得失、常治常乱と七十五題を選び「天地も昼夜も男女も善惡も、すべて事物は相對的なもので、天が無ければ地無く、地が無ければ天も無い。男なければ女なく、女なければ男もない。天があつて地があり、兩者合して始めて一つの存在をなし、男も男丈けでは不完全な存在で半分の世界である」<sup>(38)</sup>と記し、亦天保三年十一月十五日の日記に「天地尽々元一、寒暑尽々元一……」とか「男女和而一身成、春秋具而一年成」といふ風に、<sup>(39)</sup>万物は一円から化生發展するが、名による相對對立的規定は元一円に相和す存在の過程をさすに過ぎないものである。男女も絶対に対立するものでなく、男ありて女あり、女ありて男あるもの、男女相和し二者一体となつて物が生ずるのである。「二つ氣の和して一輪福寿草、咲くやこの花幾代へるとも」の自然界であり、亦人間界であると發展させ「一円に御法正しき月夜かな」と詠んだのである。<sup>(42)</sup>

かくて太極と無極、無極と万物の關係は、万物一円鏡の大元究竟不二一物に於て「混無ければ沌なし、沌あれば混あり、混沌究竟二ならずして一物なり」となし、亦一体三行録に「聞察の及ばざる所之を名づけて無極と云い、聞察の及ぶ所之を名づけて一元と謂う」と書き始めているが、無極は混沌たる一円全体であり、<sup>(41)</sup>肉眼に於て聞察及ばざるも之を名づける時一元太極として心眼により限りなき全体を究竟に捉えるも、相對の名ある万物は有るにあらず無きにあらず、有無相即して考えられるものである。そして太極とは「思慮の及ぶを云う一元の名であり、思慮及ばざるを無極と云えるのみ。思慮及ばずとて無と云うべからず」といふ様に、兩者は意識的限定の枠に入るか入らざるかの範疇的區別であり、存在上の區別ではない。兩者は同一の存在的内容規定をもつものである。<sup>(45)</sup>

#### (6) 太極の不止不転、不生不滅一

次に尊徳は仏教の空色、無始無終、不止不転輪廻、不生不滅、不増不減、等の用語を以ていかに天地の経文を見出し、人間界の人道にとり入れていつたかについて述べよう。尊徳が幼少より観音經に感激した事は前述したが、亦不動像を愛し、不動明王の如く不動の覺悟を以て高天原に独り降りし氣持で開闢の道を説いたのも有名である。亦仏説に不増不減經あれば彼に天祿増減經あり、<sup>(46)</sup>貸心借心無増減之図や一貸一借無増減之図、一器水動不増不減之図あるが如くである。亦仏に大円鏡智の語あれ<sup>(47)</sup>

ば彼に大円鏡の著あり、仏に輪廻の説あれば彼に百種輪廻鏡あり、亦表現にも仏典の章句法を用いて「願以此功德<sup>(48)</sup>平等施一切、同発菩提心、往生安樂國」と文末に記したり、又「願以此作徳、平等施一切、同発農業心、往生安樂國<sup>(49)</sup>」「願以此返金、平等貸一切、同発返納心、往生安樂國」「願以報徳金、平等貸一切、同発報徳心、往生安樂國」等自己流に置換えて道を説いている。<sup>(50)</sup>

### 1. 空、一、色

「色則是空、空則是色」という仏教的テーゼを屢々引用して自己の思想を語つた尊徳は「空は色を顕はすが、色は空に帰すであり、物皆元に帰すで循環の為に變化せざるをえぬ<sup>(51)</sup>」といい、又「夫れ元は一円一体なり。一体變化して因果となる。因果の元を悟れば一体に帰す」と大円鏡因果之図で記し、又天保四年二月七日の日記に「空則是一、一則是空、色則是一、一則是色」と書きとめて空、一、色の三者が相即の統一をなすつゝ、存在の範疇の段階を表す事を示している、と下程氏はのべて居られるが（この項を日記に於てたしかめえないのであるが）<sup>(52)</sup>之を夜話六六に記されている文によつて考えるに「仏經に色則是空、空則是色とあるが……夫天地間の万物眼に見ゆる物を空といい、眼にみえざる物を空と云えるなり。空と云えば何も無きが如く思えども既に氣あり。氣あるが故に直に色を顕すなり、譬ば氷と水との如し。氷は寒氣に依て結び暖氣に因て解く。氷は寒に因て死して氷となり、氷は暖氣に因て死して元の氷に帰す。生ずれば滅し滅すれば生ず、然れば有常も有常にあらず、無常も無常にあらず。此道理を色則是空空則是色と説けるなり」と云つて居る。

ここに云う空は前述の無極と同じもの、而して一元を号ければ太極と云われるもの、色とは肉眼に見え察間に及ぶもの一般をさすが、その個々は氣により色を顕はしそれ故に變化して不止不転の相を呈し空に帰し、亦色として姿を顕はすという風に循環する。所謂「一元不知有昼夜、一天元悟無昼夜……咲く花や散る紅葉のさまざまかはる心はいつも一色、色不異空(般若心經中の字句)春は花秋は紅葉と夢うつゝ 転ても覚めても有明の月」と、有りというも無きと云うも一つ心や一つの木一つの月の變化の中にあり、元は混沌一元天地の中に消え又生ずるもの、色則是空であり、空則是色である。

かかる色空の関係を農家大道鏡に於ては円を描き「図の如く米麦雜穀山野の百草百種、平円稜角その形異りと雖も、年々其始は根もなく葉もなく花も又根無きにあらず。葉なきにあらず花無きにあらず。葉なきにあらず花無きにあらず。粒々皆その内に充滿して玉の如し。……次の図に円に横線一を引き、有るにあらず無きにあらず然りと雖も粹々皆其の内に満備す。清れるものは昇て葉と成り、濁るものは降て根と成、其形悉く變化すと雖も

根は葉無くして生育する事不能、根より花迄一物一種の如し……根葉花実不二一物なり……百種百物種より始めて実に至る事疑なし」と一円無の如き種子が二図、三図の如く次第に内部的變化を生じ実を結ぶが再び種子なる一つの円に還元してゆき、種より種へ無限に創造してゆく姿を説き、空一色一空と循環の理を説く。

### 2. 無始無終

かく万物は種より種へと循環してとゞまる事なき故に無始無終といえる。しかも天地の悠久にして循環無限なる事「天は一歳に一嘘吸して春夏茂し秋冬收藏す。万物焉に養はる。曆軸は六拾一歳にして本に還る。(還曆)之を大天地の嘘吸に配せば浮世猶七千七百七拾六万歳にして本に還るが如し。人は小天地にして一昼夜三千六百呼吸をなす。……一年の嘘吸を權れば百二十九万六千数におよぶ。六十歳の度を量れば七千七百七十六万数なり」と。人間は天地の分身たる小天地として天地の呼吸に従い、四季に適應したる身体を持つのであり、天地の寿は悠久人力の知る能わざるもの、その始は猶更知る能わざるものといはねばならぬ。

### 3. 不止不転循環の理

尊徳は仏教の過去現在未来の三世觀通因果の理について書物上の論となし、我流儀の不書の經にみる時は釈氏未だこの世に生れざる昔より行われし天地間の真理は「米蒔けば米草生えて米の花、咲きつゝ米の実る世の中」の如く、種草花実の四世因果であるとなすが、しかし儒の及ばざる処なりと云つている。而してこの世界は「百草種になれば生ずる萌あり、生れば育つ萌あり、育てば花咲く萌あり、花咲けば実を結ぶ萌あり、実を結べば落る萌あり、落れば又生ずる萌あり」とか「咲花は必ちる。散るといへ共又來る春は必花咲く。万物皆然り、然れば無常と云も無常に非ず、有常と云も有常に非ず。種と見る間に草と變じ、実とみる間に元の種となる。然れば種となりたるが本来か、草と成りたるが本来か、是を仏に不止不転の理と云い、儒に循環の理と云。万物皆この道理に外る事はあらず」という。即ちその時その時をみれば種であり草であるから、体に即してみれば止つて居る様であるが、氣は体の中にあつて萌として非連続の外見を連続せしめ充滿してゆくのであり、不止と云える。百種輪廻鏡に云う、「夫元一円体氣也。世界広く草多しと雖も体も氣も止る事なし。種誠に至れば則生ずる氣を含むものなり。其或は草生長に至れば則花咲氣を含むものなり。……かく草生して然後万歳に至る迄草も氣も輪廻して止事なし。是これを天理自然なりと知るべし。体と氣は曇れば影のうつらん くもらぬ影はなきや有やな」万物に皆氣宿りて、その消長により變化して不止である。

然し乍ら次の不転之図に於て「外に転ずる事なし。草生

じて万歳に至る迄種生花実輪廻して不止又外転する事なし。是之を天理自然なりとするべし」といい、稻は稲一筋の道を無限に輪廻し、稻が豆になる事はないのである。

有りと思うらん生と無きと思うらん死の関係についても「生滅と皆いかめしく思へども、いつも草実と名のみかはりて」であり「生死にと世のはかなさをよくみれば、氷と水の名のみかはりて」結局「生死はうてばひゞくの音ならん、うたねば音の有りや無しやは」と水の動きにすぎず、亦気の上下による打つ打たぬの変化にすぎないのである。それ故「寿と我は水と魚とに異ならず寿命は水や、我は魚なり」と詠む。混沌たる無極から気上下して万物名付けらるるもの(60)の体をなし、その寿の盛衰、水の寒暖による如く生老病死遂に空に帰し、空より化生して不止、氷、水となり、水、氷となる如く循環する。かくて金毛録天命生死来往之図に「生者生にあらざ死者死にあらざ、陰陽来往して止まざるなり。仏に之を有無と云う」と記す。かく生死は有無であり、元は空の無極である。

#### 4. 不増不減

次に仏説の不増不減を彼はいかに解し、之を彼の天道人道の中にいかに活用したか。

万物生じ滅するも、不止不転循環して不生不滅、体の名に於て相対偏するも、その中の気によりて変化し外転せず、遍在して究竟一元空に帰すのであつた。それならば万物に増減ありや否やの問題である。井口丑二氏の報徳溯源に於て、之物理学の所謂精力保存の理を説くものとのべられる。この事に関しては、大円鏡に「刻生刻滅無増減、時生時滅無増減……降天帰天無増減、昇地帰地無増減、空生空滅無増減」と時間も時計の針が運ぶ如く刻々と時の生滅を表わすが、次々と時はたつて行き、亦空間も天から降り天に昇り、地から上昇して地に降り、還元と創造は繰返されて、物の体は名変れど、天地の氣偏遍して、所謂エネルギー不滅の原理を時間的空間的にのべたものである。「一日明くれば一日暮る。十日明くれば十日暮る。明暮増減無し。又果無ければ因なし。因無ければ果無し。一因有れば一果有り。十因有れば十果有り。又一草生ずれば一草滅す。十草生ずれば十草滅す。」……善無ければ悪なし。悪なければ善なし。一善有れば一悪有り。……楽有れば苦あり、苦あれば楽あり。…一楽有れば一苦あり」という風(62)に天道人道とも因果の理により、その長短遅速ありと雖も生滅の根元増減なく亦相対対立のものなれば空の表裏の姿の如く、曇りの氣も晴れる如く、一心変化して善とも悪ともなるのであり、善も氣衰えて悪となり、悪も氣強まりて善となるという如く、絶対の悪も絶対の善もありえぬものであり、不止不転でもであると云える。日新日々新にという如く静止は墮

在であり止まる事を許されぬのが自然の理と云うべきである。それ故「増減は器かたむく水とみよ、あちらに増せばこちら減るなり」と、一器水動不増不減之図に於て説く。(63)

然し乍ら全体からみて増減はなく、エネルギーは不滅とされる天地万物も、人間はそれら万物の性質をよく見極めた上その長短遅速を利用してよく勤める事により、人間怠けるによりそれらは減となり、人間にとつて損を与える事にもなる、現実の人間は夫々賢愚勤怠才不才の別あり、亦職業や身分の別もあるのであるが、しかし貧も富あるためのもの、借も貸あるによりてであり、人道としては貧は富となり、借は減じて貸となる様努めて、減より増に向うべきである。故に天祿増減鏡に「一円無財之図より一円一宝、一円通用増減、一宝変化貸借、貸心借心無増減、貸者借者不二一元」と説き、亦元々「見渡せば遠き近きはなかりけり己々が往処にぞある」己の居所により遠近、好悪、損得の相対が生じ、かく特殊の偏に於て暑いといい、損といい不快という。自他共に含み他の生物植物の生命に流れる遍を思う時は夢も現、現も夢の偏を悟り「垣こへて麦喰ひあらず猪鹿は、山は住居よ畑はふる郷」であるのであり、人間に出て禍するは人間の偏にて之を悪とし損とするのみである。されば人間にとりての減と云うも猪の増なりである。又「よくみれば富貧しきはなかりけり、おのれおのれが心にぞある」とするも、貧しきを去り自他共のものとして富に増をはかるのが人道であり、有るも可無きも可と不増不減なる故心得て、執着をはなれた上で、人界の為に有るを可と心得て、惜身命但不惜身命の精進をなす処に、否定の否定悲観の底に樂觀ありという境地にあるものと云えよう。盗まんとする者を拒まず、又己が身を与えて泰然たる名僧知識は洋の東西を問わず、かかる境地ならんと思う。シュヴァイツァーが鬭争対立の自然、人間界に認識に於て悲観するも、キリストと共に十字架につきてキリストと一体となる神秘主義の立場に立ち、自他共に含む生命への畏敬の為に価値増殖をはかり、蟲の火に焦がれんとするを救い、水に溺れんとするを引き上げ、又己損すとも世界の生命に一体化せりと考えるのもかかる境地なりと思う。

小人は一私の偏に捉われて他を顧りみず、少しも譲る事なく自己の利益のみを追求し、小人同志相対し争う状況益々激化してゆく。茲に人間の心の迷と一円仁の全体を考えねばならぬ事となつた。

- (1) シュヴァイツァー全集(白水社版)第二巻 P195
- (2) 佐々井信太郎、二宮尊徳伝、日本評論社昭和16年 P597 略年譜、日本史年表参照以後佐々井、伝と記す

- (3) 以後シユ全集と記す、第一巻 P 225,232
- (4) シユ全集第一巻 P 11~2
- (5) 三十六巻の尊徳全集を調べぬ筆者としては尊徳翁全集刊行会の要説二宮尊徳新撰集六巻(昭14年版)とその他門弟等による研究著作により尊徳の記せる字句を多少冗長にわたる嫌いあるも引用しつつ翁の言葉に忠実に、且この研究で紹介したいと思つた。猶纏めに当つて下程勇吉教授の用語を最も適切と思ひ使用した処が多いのをお断りしておく。
- (6) 福住正兄筆記、佐々井信太郎校訂の岩波文庫本以下夜話と記す。
- (7) 夜話、一
- (8) 夜話 四四
- (9) " 一
- (10) " 二
- (11) " 四四
- (12) " 八七
- (13) " 六二
- (14) " 二二九
- (15) " 六九
- (16) "
- (17) 佐々井、伝 P 3~4
- (18) 富田高慶、報徳記(新撰集、第三巻 P 45)
- (19) シユ全集第二巻 P 107
- (20) 三才報徳金毛録、因果輪廻之解  
(新撰集第一巻 P 131)
- (21) 三才独楽集、(新撰集第五巻 P 342)
- (22) 夜話六六
- (23) " 九九
- (24) 佐々井、伝 P 21~2
- (25) " P 30
- (26) 新撰集第四巻 P 397~8
- (27) 夜話四五
- (28) 下程勇吉、天道と人道、岩波、P 15
- (29) 夜話四五
- (30) " 九九
- (31) " 八七
- (32) 大分県立芸術短大紀要第一巻 P 10
- (33) シユ全集第七巻 P 267、第六巻 P 171
- (34) 紀要 P 8
- (35) 新撰集第一巻 P 33
- (36) " P 78
- (37) 新撰集第一巻 P 37~42
- (38) 第一巻 P 138~146
- (39) 第五巻 P 320~1
- (40) " P 325
- (41) 第五巻 P 329 (天保四年二月朔日の日記)
- (42) " P 315
- (43) 第一巻 P 211新撰集の編者は万物一円鏡とは宇宙の本源を一円一元とみる翁が一円鏡に物をうつしてみても万物が往来輪廻変化、不止不転の運動に於て全体に秩序を保ちつつ、一円融合の生に発展の理を説いたとのべている。
- (44) " P 207
- (45) 夜話九
- (46) 夜話五十
- (47) 第一巻 P 313
- (48) " P 163~196
- (49) " P 344~5 (天地自然談三、八種産業自然談草稿)
- (50) 第五巻 P 366~7 三才独楽集、四安楽国
- (51) 夜話百四八
- (52) 天道と人道 P 24
- (53) 第五巻 三才独楽集 P 345~6
- (54) 第一巻 P 328~9
- (55) 第一巻金毛録、天命四序変化之図 P 54
- (56) 夜話四四
- (57) " 百九
- (58) " 百十三
- (59) 第一巻 P 177
- (60) 第五巻 P 346
- (61) 第一巻 P 141
- (62) " P 157~8
- (63) 第五巻 三才独楽集 P 360
- (64) 第一巻 P 323 天録増減鏡
- (65) 第一巻 P 315~20
- (66) 第五巻 P 361
- (67) "
- (68) "

## 地 (三) 意識界

### (1) 意識と存在

万物の元を探るに混沌無極なるも人間名づけて一元太極となし、それが氣により遍満するも、体に充満して万物の名が生ずる故に、之を名づける人間の心こそ存在一般の認識根拠となるものである。しかしその心が因果循環の理を弁えず迷う結果、迷いの果を生ずる。

かかる心を生ずる人間は万物發言集にのべる如く万物の發生ではずつと後の世に生まれたものである。即ち「極小形の物短命のもの生じ、段々大蟲大畜大鳥生じ、其



後漸く人物生ず<sup>(1)</sup>と極めて緻密に進化論的に述べているが、その人間の認識によつて名が与えられて天地開闢とか万物の変化を云々できる訳であり、主客成立するである。それ故下程氏の云われる様に「かく人の「名」に於て世界が、その対立規定を開闢し来るところに、意識性に基く人間の形而上学的位置がまさしく論定される。即ち人間は万物に「名」を与える主体性に於て宇宙唯一の自覚存在として自己をもつのである。」と云えるのである。<sup>(2)</sup>

それ故天地の運行は人間の知る知らざるとに拘りなくなされるかも知れないが、之を認識する人間の我が客体の体に名を与える事により、運行の諸現象は人間の意識現象として、次元を異にして開闢し来るのである。パスカルの云う如く人間はか弱き存在なるも、考える故にそして自己の小なるを知る故に、自然に対し自然よりも大となりうるのである。

## (2) 一円仁と一円空

然らばこの人間の意識界を尊徳はどのように解したか。一体三行録に云う。「一元有れば十方有り……我体有れば我空有り。我体無ければ我空なし」(我に体有り。之を知る故に外をみ、空その他風火水地を知る。故に有りとなす。我思う故に我あり、物ありと発展してゆく。)次にこの我体には心あり、「是心有れば是仁有り、是心無ければ是仁無し。仁有れば更に義、礼、智、信、忠、孝、喜、怒、愛、邪、正、貧、福有り」と。ここに意識界の主体は仁であるとなし、この仁あるによつて義礼智等の諸規定となつてゆく。仁の義礼智信に対する関係に就ては語録に「仁は虚なり。……義礼智信を合すれば仁也。義礼智信を去れば則ち仁無し。」と云い、仁は義礼智信と次元を異にし上位にありと考えられる。それでいて「義礼智信の何れかでない事もない」と記す。かく仁は虚なるが故に義、礼、智、信となり<sup>(5)</sup>、それらをあらしめるものであり、それらの中に含むものであり、義と礼と名の異なる如くその相異なれ、義と差別される故の礼が義の否定としての無という如きものでなく、否定し無の如くあれど義を可能性として含んで居り、それ故有とされる如く、礼智信に対しても同様の謂わゞ天道界における空の如き存在とされるのである。かくて一元空の世界に対し、之を認識する主体たる人間の意識界を一円として、その一元を仁と規定したものと云えるのである。一円空を天地の根元とすれば、一円仁は人道の根元であり、仁なくしては義も礼もなく智もなく信もない。儒教道徳に於て仁が根元である如くである。

しかし人間の意識界に於て主体となり根元となる仁はいかにして生ずるか。それについては金毛録の天地開闢

生死之解に次の如く述べる。

夫れ元は一円体気なり、体気配して陰陽となる。未だ陰陽割れざる時は陰陽の来往無し。来往無ければ必ず身体無く、身体無ければ心気無く、心気無ければ身体無し。……身体有れば生死有り、一生有れば一死有り。<sup>(6)</sup>

かく心と体とは相即的存在であり、両者は引離しえない事を万物発言集には、

元来心と体とは一物一体也。体あれば則ち心あり。心あれば則ち体ありと述べる。<sup>(7)</sup>

更に大円鏡善悪之図には一心変化を

夫れ元は一円一心なり。一心変化して善悪となる。善悪の元を悟れば一心に帰す。<sup>(8)</sup>

一円仁は天地開闢により体気人間の身体となるその中より、意味的に相即して心身対立開闢を生ぜしめる根元であり、(身)体と対立する心(気)は更に変化して善悪、邪正、苦楽、勤怠、驕儉、禍福、吉凶、安危と変化し、しかも不止不転である。<sup>(9)</sup>

人間身体を持つ故に気は遍なれど体により偏し、生を喜び死を忌み、相対対立、因果之理に従いて動く。無常にして有常なるを知らず生に執着し欲に捉われて利己に傾き易い。

## (3) 身体我と人道

かくて天道に於て不言の経を繰返しつつあるを知らず又知るとしても身体をもつ故に身体我のため欲に捉われるのであるが、己が心をよくみる事により「我心の田畑に生ずる私欲という草はけづり捨て、我心の米麦を繁榮させるのが人道の勤である。……人道の勤むべきは己に克の教なり。」と悟らねばならない。亦続けて「人道とは人造なり。<sup>(10)</sup>されば自然に行はるゝ処の天理とは格別なり。天理とは春は生じ秋は枯れ……昼夜運動して万古変らず。人道は日々夜々人力を尽し保護して成る。故に天道の自然に任すれば忽に廢れて行はれず。又人の賊む処の畜道は天理自然之道なり。尊む処の人道は天理に順うと雖も又作為の道にして自然にあらず。如何となれば雨にぬれ日には照られ、春は春草を喰い秋は木の実を喰い、有れば飽迄喰い、無き時は喰ずに居る。是自然の道にあらずして何ぞ。居宅を作りて風雨を凌ぎ、蔵を作りて米粟を貯へ衣服を製して寒暑を障へ、四時共に米を喰うが如き、是作為の道にあらずして何ぞ、自然の道にあらざる明らかなり。夫自然の道は万古廢れず、作為の道は怠れば廢る。」<sup>(11)</sup>

それ故「天道は受に興し施に興す。人道は受に興し施を悪む。天道は楽苦、富貧、吉凶、禍福等に興し、人道は楽、富、吉、福に興し、苦、貧、凶、禍を悪む」というのも、人間身体ありて生を喜ぶからであり、その反対を怠り悪むが、天道は之等を御構いなしに、只天地の運

行は寒暑生滅と繰返すのみである。

然し乍らこの作為人造である人道も君子と小人の違いにより天道と人道の如き別が生ずるものである。即ち「君子は(天道の如く)受に興し施に興す。小人は受に興し悪む」という如くである。小人にありては「人道とは人の為立てたる、人身に便利なるを善とし不便なるを悪となす」を自己一己のみの利益と思ひ、その為をはかり勝<sup>(14)</sup>であるから施を悪み人道を誤まるものである。

この人身に便利なるものについて尊徳の語る処は極めて物質本位的である。然し乍ら、

此身食也。食者此身也。然則昨日食今日我身也。今日食翌日我身也。食身合為一体。地則穀。穀則地。穀不異人、人不異穀。穀則人。人則穀。<sup>(15)</sup>

我という其大元を尋ねれば、食うと着るとの二つなりけり。人間世界の事は政事も教法も皆此二つの安全を計る為のみ。其他は枝葉のみ、潤色のみ。<sup>(16)</sup>

と語り、フオイエルバツハやマルクスの「人間とは食べる 処のものである (Man ist, was er isst) に似ている。尊徳は人間を米食い蟲であるといい「人の立てたる道は衣食住になるべき道を増殖するを善とし、此三つの物を損害するを悪と定める」点、一種の実用主義とも云える。その点岩崎勉氏がいわれるように近代的な文化やその発展向上に就ての積極的説明はきかれず、東洋思想一般に共通した文化に対する消極性をみななければならぬ。<sup>(17)</sup>

しかしこの点シュヴァイツァー博士が西欧の近代文化を捨てて白人の罪を贖う決意でアフリカには入りこんだのであるが「自分は文化を捨てたのでなく、すべて人を助け善を行う処に文化は存在する」と訪米の際アメリカの新聞記者に語つた事や「幾何学の公理の様に単純な善悪の観念こそ真の哲学倫理の求めるものであり……善とは生を保ち、生を促がし発展しうべき生をその最高の価値に迄達せしめる事である」とのべているのと相通ずるものが認められる。両者とも単純にして分り易い通俗的ではあるが、正に人間生命ある限り身体を保つ営みにとつて衣食住は不可欠のものなれば、万古不易とも考えられる故に真理なりといえよう。そして石原惣六氏のいわれるように「英米の実用主義と同列し能わず、快樂説的分子、個人主義的要素の介在せざる事」は後で明らかにされるであろう。かくて人間には天理に従い「此身食」の立場に立ち米麦を繁茂させ、天理に逆い雑草をけづり捨てる様に人間に都合よきをとり善とし、悪しきを悪とする意味に於て、「善悪は人身の私より成れる物にて人道上の物、故に人なければ善悪なし。人ありて後善悪はある。」といえるし、天道は善悪に無記であるが人間は身体的立場に基いて善悪対立を開闢すると云われるのであ

る。

#### (4) 相対対立、開闢の原理としての身体我

しかし人間が自己の食の増殖の為に努めて増殖するも他の人間の食にとり減となるという風に利害対立する場合は所謂生存競争という形で互に争闘するという結果をうみ、その争いは大きくなり、集団的、国際間の争いともなる。それらは歴史的には支配階級と被支配階級をうみ、階級の名は変れど存続してきた。支配階級は権力を以て法を定め、掟としてすべての人になさざるべからざるものとして普遍化し納得させんとした。亦宿命とし、因縁として納得させてきた。処で階級の権力による支配は法の存在を危くし相対化せしめる。力こそ正義という形は、力なければ他に代られ否定せられるからである。そこで宿命や因縁、摂理として神掟説となる。そして之を具体化するものが聖王賢臣である。儒教では聖人や天の上帝、人を憐みて掟を定めんと来臨する事になる。人々の主観的、合理的欲求は超越的絶対的なるものの中に満足を見出す。それは自分だけ欲し正しいとするのではなく、すべての人が然り、否それ以上である神のよしとする処であるから、各人は唯従わねばならないとする。尊徳も儒教流に「聖主賢臣覽梅して日々夜々人力を尽し保護して拵らえたる作為の道」と云う。<sup>(24)</sup>

そして人間の心は「天道の自然に任すれば人道は忽に廢れて行はれず」なりゆくもので「水の低きに流るゝ如く情欲の儘にする時は立たず、己が思う儘にゆく時は突当る」ものであるとなす。それは人間の情欲の力は雑草のはびこる如く根強く、至る処でのばさんとするものであるからである。而して之を恣にするれば「強大は弱小を食み、止一幹一身を養うのみ」の鳥獸草木と異ならぬ万人対立の不安と不幸の状態に陥り、それは拡大してきた。もともと一円仁である人道が、人間の身体我の故に「一心治乱、善心有悪心有、乱一心、乱千心」という風に自己分裂、自他分裂を生ぜしめ「暑に住む者は寒風を好み、寒に住む者は寒風を悪む。売者好価多、買者憎価多、貸者好利高、借者悪利高」という様に、又「ちうちうと歎き衰む声きけば、鼠の地獄、猫の極楽、漁師の楽は魚の苦、世界の事皆斯の如し。是は勝て喜べば、彼は負て憂う」という様に、己の身体の居る所により立場が異なる為対立するのであつて、之「見渡せば善きも悪きも無かりけりおのれおのれが住む所にぞある」「好悪は我が居る所に在り、元一円一物」なるを忘れ、只価高く利多く、暑ければ寒を願ひ、寒なれば前に寒を願いたるを忘れ暑を願う自分勝手な一方的な偏心、私心、執着に墮するのである。所謂「一切の認識と価値を自己

中心的に相対化する無明、悪の主体に化する」のである。<sup>(31)</sup>それは個人から夫婦更に家族、集団、国家が人間存在の個人的契機により私的存在と墮し、人間存在の共同性を否定し、亦各々の眼界の外なる公共性に着目しえない事から生ずるのであると云えるのである。<sup>(32)</sup>

#### (5)「天道の自然」と「人道の自然」一欲望論

人間は「人身あれば欲あるは天理なり。田畑へ草の生ずるに同じ」<sup>(33)</sup>であり、万物と共に生存の為個体保持種族保持の欲望<sup>(33)</sup>を本能として与えられている。そして天理に従い、之に適応して生きる事を覚え「米喰い蟲」になり「此身食也」となる。そこには既に「雨にはぬれ、日には照らされ風には吹かれ、青草を食い、木の実を食い、有れば飽喰い、無き時は喰わずに居る。自然の道に従う生活から自然その儘でなく、工夫して人間に便利なるをつくり、自然に手を加え米麦を作り、貯え、衣服を製し四時共に米を喰う作為の人道があるのである。

人間の欲望はここに於て「勞身耕田、耕田植稻、植稻得米、喰米養体、養体保寿、天道自然」<sup>(35)</sup>に従うのであるが、しかしここで人間互いに欲望の衝突なければ問題は無いのであるが、前述の如く争い、私的存在として「畜道」に陥る。尊徳は人道と欲望との関係に就て水車と水の関係で説明して云う。「人道は譬ば水車の如し。其形半分は水流に順い、半分は水流に逆うて輪廻す。仏家の世を離れ欲を捨てたるは水車の水を離れたるが如く（水車動かなくなる）又風俗の教義も聞ず、義務を知らず、私欲一偏に著するは水車を丸々水中に沈めたるが如し。共に社会の用をなさず。故に人道は中庸を尊む。人の道もその如く天理に順いて種を蒔き、天理に逆うて草をとり、欲に隨いて家業を励み、欲を制して義務を思うべきなり」と。かく欲望が過度になり、社会人としての在り方<sup>(36)</sup>を越え、公共性に背き、公共的存在としての義務に抵触する時、それは非難さるべく、制せらるべきものとなる。だから義務に抵触せぬ限りに於ては欲は大なる程よく、之をよくなすものは聖人である。「聖人は世人皆無欲と思えども然らず。其実は大欲、凡夫の如きは小欲の尤も小なる物。其大欲とは万民の衣食住を充足せしめ、人身に大福を集めん事を欲するなり」<sup>(37)</sup>と説く。之夷政者の心掛くべき欲である。

次に制せらるべき欲とは何であるか。之については「身体に就て生ずる私心の草は作物を害する如く、道心を荒す物」<sup>(38)</sup>であり、身体我の公共性を否定する面をさすと考えられる。又「己は私欲なり」<sup>(39)</sup>といい、同じく制せらるべきものとなす。先の身体に就て生ずる私心之私欲なりと云えよう。具体的には「天性の自然たる美食美服、好む処の安逸奢侈、好む処の酒を控え」<sup>(40)</sup>ねばならないと

いう。何となればそれらを縦にする時は「有余を生じ他に譲り向來に譲る人道」に支障をきたすからであり、「人道は欲を押え、情を制し、勤め勤めて成る物なり」<sup>(41)</sup>だからである。<sup>(42)</sup>

此処に彼の云う人道は、天道に対する人間作為の道「耕田、植稻、得米、養体、保寿」の「天道自然」であるばかりでなく（既述）「勞身耕田、耕田植稻、植稻得米、施米救民、救民得國、人道自然」<sup>(43)</sup>たる君子の大欲の道であり、小人の、他人に損をさせ己の益をうるを、喜ぶ世間の人道とは異なるものをさすのである。故に「我身は損すとも他の身上には損を掛じの精神がなければ、道德の本体全くと云われず」<sup>(44)</sup>といい、私に偏し淫する事なく利他に道德の本体を認めていると云える。そして「飯と汁木綿着物は身を助く、其余は我をせむるのみなり」<sup>(45)</sup>と詠むのである。

しかも彼のとる人道は「彼方にて田地を買て悦べば此方に田地を売て歎く如き、只彼方此方の違いあるのみの本来増減なき道ではなく、直に天地の化育を賛成するの大道であり、天つ神の積置かせらるる無尽蔵より、此世上に取出す、真の増殖の道」<sup>(46)</sup>をさす。それは一方悦び他方歎く処の「片楽」の道<sup>(46)</sup>でなく、「真楽両全」の道であるが、尊徳は之を「天地の道、親子の道、夫婦の道と又農業の道の四つなり。（となし）百事此四つを法とすれば誤なし」という。この農業の道は「天下一同に之をなして閭なき業故万業の大本、全国の人民皆農となるも閭なく立行く可し」<sup>(47)</sup>であるからであり、封建社会における国の百姓を重農主義的に考える為、彼の農村救済は己の生活を放擲しても人為に全生命を以て当つたのである。<sup>(48)</sup>

かくして人為耕して米を得るが、欲を制して受を喜ぶのみでなく施を好む人為に進むべきを説く。そして両全真楽の真の増殖の道<sup>(49)</sup>を人道として定立する。しかしそのみならず「道路橋梁の悪くなるをみて捨てておくは人道の罪人であり、放懶怠惰自ら貧苦に陥る者は神聖の罪人」<sup>(49)</sup>とさえいい、万人の衣食住の充足をはかり、その増殖をはかる人道に於て、それを妨げる事は故意にでなく消極的にも罪人との厳しい非難もて、人道に立たせんとするのである。山も高く登るにつれ険しく、下をみる事は不要であり危険でもある。その位置を守るは高くなる程難くなる。そしてそこでは一寸の不用心、心の弛みも禁物、ここに道路の悪くなるも自然であるが、之を捨てておいても自分に差支えはなくとも他を傷けひいては自己を傷く事になり、又人為を思う心構えからは猶至らないのであるが、之を鋭く良心の苛責として感受する程その人は高揚しているのである。茲に物質的な衣食住の増殖を人道とするは功利主義的な物質本位的な幸福説を説くようにみられるが、しかし人道の罪人としてみ

亦後述の様に之を報徳の道として説く事により、精神的なものを根底に持つ事が明らかにされるのである。

しかし人間は身体あるにより欲あり、欲をもつ身体我の故に人身に便なるを善とするも、己私に偏して一心迷い変化して、善も他を害する悪と化す無明の闇に陥り、相対対立をおこすのが普通である。遠き近きは己が身にある事を忘れ、我が身に近きをとり遠きを忘れるのが、肉眼による限界内の個別者の私的存在化である。そして「自他を見る事能はず……半人足の寄合い仕事」で満足し「利を得て喜び、損をして悲しむ。苦楽存亡榮達得失こちらが増すとあちら減るとの外になし」「物一得あれば一失ある」を忘れ、己の見を正しとなし、己をよしとする態度をとるは迷いである。この迷いを打払うべきものとして尊徳は悟道を説く。

- (1) 第一巻 P 233
- (2) 天道と人道 P 51
- (3) 第一巻 P 209
- (4) 語録、大日本文庫本 P 164、空仁二名論稿、新撰集第一巻 P 200
- (5) 金毛録、五常配当之図第一巻 P 60
- (6) 第一巻 P 84
- (7) " P 237
- (8) " P 158
- (9) 金毛録苦楽之図、第一巻 P 159
- (10) 夜話六
- (11) " 四、五、万物発言集、第一巻 P 239
- (12) 第一巻 P 241
- (13) " P 242
- (14) 夜話二
- (15) 万物発言集、第一巻 P 237
- (16) " P 294
- (17) 夜話百十六
- (18) " 百十四
- (19) 理想六十号、P 55
- (20) 紀要 P 4
- (21) " P 4, 6 (シユ全集第二巻 P 195)
- (22) 理想六十号 P 116
- (23) 夜話二六
- (24) 夜話四、五
- (25) " 四、五
- (26) 語録、一の四
- (27) 金毛録、一心治乱之解 第一巻 P 90
- (28) 農家大道鏡 P 332—3、万物発言集 P 255
- (29) 夜話四一

- (30) 農家大道鏡 第一巻 P 333
- (31) 天道と人道、下程 P 82
- (32) 和辻博士、倫理学上巻 P 241~6
- (33) 夜話六
- (34) 夜話五
- (35) 万物発言集、第一巻 P 259
- (36) 夜話三
- (37) " 二百十七
- (38) " 百三三
- (39) " 六
- (40) " 四
- (41) "
- (42) "
- (43) 万物発言集、第一巻 P 259
- (44) 夜話百四三
- (45) " 百三二
- (46) " 百十七
- (47) " 四一、四二
- (48) " 百四一
- (49) 語録一の五
- (50) 夜話百十六
- (51) "
- (52) " 二百十一

## 人 (四) 人倫界

### (1) 悟道と空

しからば悟道はいかに迷いを示すか。亦それ故執着としていかに脱すべきものとして説くか。

天道界人間界の物事すべては不止不転であり不生不滅であつた。人は結局自然の子であり、我という個々の人からみると死すべきものであり、盛者も必衰、滅すがとゞのつまりである。すべて元を悟れば大自然の運行に托せざるをえず「生といえは生とや人の思うらん、転べば死する人の身の上」「氣と体と生きて働く人の寿は樽につめおく水の重さよ」であり、水が自然の運行により衰え軽くなり、老衰死となるも天地の運行に寿従うのみで「一命元悟無生死」「旋転不止の世界に住する物」である。

又身体我の意識による善悪禍福得失等の対偶的呼称の事物価値付の世界は対立の三界城であつて、何れも人間本位的のものである。「人ありて後に善悪はあり……善と云つて分かつ故に悪と云う物出来る」のであり、「その一つなる物の半を善とすれば、他の半(否定、减小、消失)は必ず悪也」高きに登る程降る事も深しで、悪

はつきまとい潜み、可能性としては存する。親鸞上人やルーテルが己を悪人として厳しくみる如くである。低き人は意識せず、悪に強き人亦善にも強くなりうる機縁「善人猶もて往生を遂ぐ、況んや悪人をや」である。

## (2) 悟道と人道

かく「自然の行く処を只みるのみ」の観照の立場を尊徳は悟道と云っているが、しかし人間はそれだけで済まされないものである。「悟道とは譬ば当年は違作ならんと、未だ耕さざるの前に観ずるが如きを云、是を人道に用いて、違作なるべき間耕作を休まんと云は人道にあらざ。又田畑は開拓するとも又荒るゝは自然の理なりとみるは悟道なり。而て荒るればとて開拓せざるは人道にあらざ。……又人倫は家を造るなり。故に丸木を削りて角とし、曲れるを揉て直とし、長を伐りて短とし短を継て長くし、……家作をなす、然るを本来なき家なりと破るは悟道なり。破りて捨る故に十方空に帰するなり」といい人道と悟道を区別し、両者の役割を「夫人倫の道とする処は仏に所謂三界城裏の事也」、身体我をもつ人倫は善悪対立旋転してやまぬ迷の世界である。仏教的悟道は「繩の縷を戻す」が如く、自然の行処をみて浮世の夢迷を知らしめ、又私に偏し執着するを「有常も有常にあらず」と悟らしめる故に、悟道のみにては「人道蔑如」苦集の諦を強調する事になり易い。尊徳は「仏に悟道の論あり。面白しと雖も人道を害する事あり。則生者必滅、会者定離の類なり。其本源を願して云が故なり。悟道は譬ば草の根は此の如しと一々顯はして人にみするが如し。理は然りといへ共、之を实地に行う時は皆枯るゝなり」といい、仏教は「此世を僅の仮の宿、来世こそ大事なれと教う、」又「此世は仮の宿なり。無常にして苦なり。早く世を捨てあの世の後生を願えと説くのみ」であるといい、治心の術として制し雖も欲を制するに來世の欲を以て、現世の無常を強調しすぎ「世を遁れ世を捨つ、(故に)世上の用をなまず」禁欲的なるはよいが、現実に対し悲觀的消極的であり、治心も人為の人道となつて勤める活動の点、儒教による治國平天下の道に及ばず。従つて実践の為の悟道たりえぬと批判する。

## (3) 迷と人道

かくて身体我により善悪対立する現実の人倫に於ては欲に随つて家業を助け、欲を制して義務を思うべしと云われるが、欲あれば迷いもつきものであり、否迷わぬ事こそありえぬのである。即ち「迷うが故に人倫は立つ」といわれるのが現実である。

人は所詮死すものと平然と悟つても、平素死を忘れ、生のため迷つて勤めるから人倫は縷がかかつて立つので

ある。最初から死ぬものと思ひ、勤めても馬鹿らしいと何もせねば、人生は退屈であり、従つて人生の意味も見出されず、清極の諦観か享樂主義か虚無主義に陥り勝である。物皆その体に即しては相対対立を生じ、迷い偏すれど、氣に即しては「草木種となりたるが迷か、草となりたるが迷か、又何れが本体か分らない。」しかし体は氣の靜止的現出をみたものであつて、その内をみるならば氣は絶えず居り、一元、氣の元に帰る遍の運動の過程に外ならない、靜止固定は物の真相ではない。而して迷は固定に執着し他との連関を見失ひ、全体的考察をなさぬ偏に基く。迷いを迷いと悟り、迷いを否定する為には先ず迷はねばならない。而も迷いと悟りつゝも尙迷う悟こそ、体氣相即の現実の悟であり、迷の裏に悟、悟の裏に迷あり、迷悟合一の境地、迷いともいわれず、悟りともいわれず、恰も繩の如く「本来迷悟一円」の姿こそ真相と云える。

かくて否定に於て天道に逆ひ、動物にぬきん出て小宇宙とも云うべき第二の自然を創造し、之を開闢し、而もその帰する処を知り、現実の相対対立の偏で迷ひ否定するも、否定の否定に出て悟りて勤め、勤めて迷う過程を繰返し、(人生とは謬るものなりの謂の如く)一元一円空に帰する運動こそ人生界の真相である。和辻博士の「人倫の根本原理には全体に対する他者としての個人の確立の契機(此処に自覚の第一歩があり、個人の自覚が無ければ人倫はない)と全体の中への個人の棄却という契機を蔵する」という事が適用されると思う。

## (4) 天の分身としての我

然らば人間はいかにして自己を自覚し、次に自己を全体に棄却し、人道の賞すべきをとるか。彼はいう。「凡そ世界、人は勿論禽獸、蟲魚、草木に至る迄皆天の分身」被造物である。亦「元天地は万物の父母、天地無くして万物あるなし。万物は生民の父母、万物なくして生民あるなし、故に生民は天地の化身なり。如何なれば天地の間に生れ、天地の化物を喰ひ、天地の間に長じ天地の間に終る。」又「万物は土中に生じ、土中に帰す」この故に「天日の御影にもれたる物はない。」「天地と共に可行、天地と共に可動」となす。何となれば「身体は父母の賜物なり。其元天地の生命と父母の丹情に出づるもの」である(父母の根元は天地之命令にあるから)からかくして「人が世にあるや天地人三才の徳に頼らないものはない」のであり、されば「天地は大父母……(それ故)天恩の有難き事は顯然なり」として、子の父母に対する創られたる者としての父母に対する氣持を恩とするを、天地と人間の關係に推し及ぼし天恩として認め、之を感謝すべきであるとなすのである。

之については第三郎左衛門に宛てた手紙の中に次の如くのべ、人間として御恩、礼を勤むべきを説く。「夫人は我身の天を悟りたまへ。我身は我者か。弥々我者ならば何国より持参仕りたまふ哉、いつ口を作りて呑喰味を知りたまふ哉、いつ手を作りて用を達し業を成したもう哉、いつ足を作りて歩み諸国へ行き歸りたまふ哉……作りたる覚え有る哉。無ければ全く我が身にあらざり、是の如く我身さへ我者ならざれば、照る日、寝ゆる夜、呑水息する風、居る地の御大恩は云うに及ばず。天地の間に有る物、皆天地の造化仕置たる事も知らず、猶田畑山林居家敷銘々先祖の円精して子孫に伝えんとする事も知らずして、生涯我心の儘に自由自在をなす。故に人と生れて人たるかひなく、心の儘ならず。この元を知りて御恩、礼を勤めたまえば、直に我と天地と一体に成て富貴万福心の儘ならざる事なし。

「己が身は有無の都の渡し船

行くも帰るも 風にまかせて」<sup>(24)</sup>

又天保四年の日記にも

「我身と我心我ものならざる事を知りはべらば、人として不足なし、不自由なし。心の欲する所に成就せざる事なし」と記し<sup>(25)</sup>

「本来人の生るゝ時は一物も持参する者にあらず。また死する時も持ち往く者にあらず。裸にて来り、裸にて帰る者なり。然るを我が物となすは知らず、無を悟らざる人なり。生の元は人々皆何心なく生れ、何心も有る無し。何心なく死して本生に帰る。仏法にて成仏と云い、今世にて念願成就と云い、生ずるものは長育を成就と云い」と説くように天地万物回転不止の運行により陰陽五行配合により贅育せられ、一つとして独立した存在、我<sup>(26)</sup>というものなく、心も身体我により名づけられた名の相対対立により、欲生じ善悪変化して行くのであるが、すべて己一人つくり、己一人の力によるものでない。その事は目的意識をもち自覚して生まれたのでない事からや又成長しての自覚も社会のお陰により言語思想、父母の円精による身体的遺伝、性格により、形成されきたつたものであり、万物と共に土中に帰すべきものである。我が身の(元は)天(地の化生)と知り、行末を死して天に帰すものと知る事により、わが物と思うて傘の雪を軽して思うても、亦そのために偏し、欲が重しと願う為に心に不足生じ不自由を感じ、それが他人を傷け禍する事になり、遍の一円仁の人道より違がる事になるのである。我の身も心も有無の橋渡しにすぎずと思い、一日生くれば一日丸儲けと思う気持で、しかも悲観絶望に自己を偏せしめず、天道の自然をその儘うべなう気持で従いつゝ、否定の小人の人道を否定して、人道の自然たる恩に報いる人為の勤めに邁進する時シュヴァイツァー博士

の進む如く、しかも羅針盤なきに非ず、自信をもつて進む事が出来るのである。

#### (5) 我身の元としての天に報いる

かくて我身、我食、我が持てるものすべて父母祖先の丹精にある事を知る事により天恩として有難く生をうけ子孫に、恩に報いる気持で「人道の自然」を勤めて遣さねばならぬ。之人間平凡の裡に歴史的形成立ち来たり、よりて文化も進んできて居る事であり、之を自覚する事により恩の形而上学ともなるのである。

されば人間の生の欲望も我身一身の欲望に非ず、天理によるもので、之我身ならぬ祖先から譲り受けた贈物として考え、又後世へ遺されてゆくものであるから、身体髪膚を毀傷せざる孝の始から、欲望も他人の価値増殖の為に使う様心掛ける事により、祖先の丹精に応え、天恩に報ゆる事が出来、大孝とも云わるべきである。

そこで生きる事は生かされているともいえるのであつて、生きて人身に便なるを増殖するも何者にも惜しまず恵を与える天道の自然に従つて、天地と共に行くならば之夫に翼賛し天地と一体観の下に生活する事が出来ると云えよう。恰もシュヴァイツァーがイエスと共に十字架にかゝりたる回心を以て、イエス神秘主義の下、生命への畏敬の倫理を実践して行く如くであるが、尊徳の場合神秘的と云うより合理的に天を解し、行つているように思われる。

かくて根本は天地であり、之あつての人命であるから本を忘れず始に反りての勤こそ人道の極致である。洵に天地開闢の始に一人降り立ちたとして、亦「若明日より日輪出でずと定まらば、一切の私心執着も(仇桜であり)有べからず」結局行末の死を思い、「天徳に報い、父母の思に報う行いを立てる」が先決問題で、かくする事は「性に率いて道を踏む」<sup>(27)</sup>のであるから「来世は願はずして安穩なり」とも云え、窮まりなき天地と共に行く故万古不易、来世を願う必要もないのである。<sup>(28)</sup>

かくして人身を持続するための衣食住増殖の経済の道は、天地社会への報恩の道へ通じ、相対対立開闢の身体我も偏より天地一円融合の遍への活動に転じ、絶対空(一円仁)の自己還帰の円環を進む事となり、人道の極致とみられるに至るのである。

#### (6) 徳 と 恩

不云して繰返さるゝ天地の運行から経文を学びとつた尊徳の即物性は天地万物に恩を感じ徳を見出し、我身の天を悟る事により、天地人一体、一切我の一円仁全体主義の立場に立ち、報徳こそわが教の根本なりとするに至るのであるが、彼のいう徳、恩について報徳訓により述べる事にする。

「徳の異名を恩と謂う、恩の根本は徳なり。徳の根本は勤苦なり。徳の根元を悟れば勤苦に発す。徳の消滅を悟れば遊樂に終る。本来勤苦積りて徳を成す。」と。茲に勤苦により徳が生じ、遊樂により徳は消滅する。<sup>(81)</sup> アリストテレスのAreteに似て、働らきが習熟により優れたものとなれば得を与え、価値あり。それは他に恵利益を与える。かかる仿らきは得なる故徳であり、かかる徳性をもてる人は有徳の人、品性備わりたる人である。それ故人之により恩恵をうけ、恩を感じざるべからずである。又崇めざるべからずである。

又勤苦遊樂徳増減は、勤苦なくして人の道立たず。人としてすぐる能はず。若い時の苦勞を大事とし、鍛練を強調するも昔からであつた。人による人の搾取はマルクスの勞働価値説となるが尊徳をして云わしむれば人道の大罪人とも云わるべきものである。

尊徳の説く徳は人間のみに限らず、之を天地万物に見出し説く処に独特さがみられる。即ちすべて天地万物の運行により動き生じ、之に人間人身に便利なるものを見出す故に之を徳とし、又それ故有難きものとして之に恩を感じずる故徳と恩とは同じものの見方による違いと云えるのである。而してそれらすべては万物に与えられたもの（人間により見出されたとしても）であるが、人間の勤苦によりてはじめて之を利用し享受し、その維持増殖をはかりうる故に、天道にまかせて自然の儘にすると荒廃するも、人道勤めて作為の道に於て、天地万物の徳を贊助する事が出来るのであり、故に物徳開発は勤苦積りて徳をなすというのである。茲に万物天地二間の中で、人間のみ「万物の靈長」として、名に於て天地開闢させる認識主体たるばかり<sup>(82)</sup>でなく「食此身」故の勤苦により天地人三才報徳の一円仁融合の自覚生じ、我身の元に帰一し、一切我の自由境に天地と共に進む事が出来るのである。

- (1) 三才独楽集 P 345~7
- (2) "
- (3) 夜話二六
- (4) " 七十
- (5) "
- (6) "
- (7) "
- (8) " 百六九
- (9) " 五四
- (10) " 百九
- (11) " 四一

- (12) " 七十
- (13) "
- (14) 倫理学上巻、岩波、第一章五節人間存在の根本理法
- (15) 夜話百二六
- (16) 未定稿第一巻 P 294
- (17) 万物発言集、" P 246
- (18) 夜話百二六
- (19) 第一巻 P 293
- (20) 夜話二百一
- (21) 報徳訓、第一巻 P 275、金毛録 P 123
- (22) 語録四一六、第四巻 P 311
- (23) 夜話百八十
- (24) 第五巻 P 180
- (25) 第一巻 P 293
- (26) 未定稿、第一巻 P 295
- (27) 夜話百八十
- (28) " 二百一
- (29) "
- (30) "
- (31) 第一巻 P 304
- (32) 夜話百五二

## (五) 報 徳 教

### (1) 物徳開発と報徳溯源

しからば尊徳は徳をいかに見出したか。彼の最初の報徳訓から徳の名をつけたものを記してみよう。

混沌、天地、三光、五行、国郡郷村、山林河海、身命<sup>(1)</sup>誠心、五倫、五常、衣食住、四民、田畠家財、金銭米穀、船橋、牛車、上下貴賤、貧富各々の部に於て「無報空徳者、日夜失空徳。有報空徳者、日夜得空徳。（かかる文体で終迄徳の名変るのみで続く）即風徳、火徳、水徳、地徳、天徳、地徳…日月星木火土金水神仏の徳と各部分の字にそれぞれ徳を認めて徳の字を添え、之に報ゆる勤苦日夜なければ、その徳を日夜失うと説きすゝめる。

この報徳訓が三変して今日の三才報徳訓となり「父母根元在天地命、身体根元在父母生育…<sup>(2)</sup>年々歳々不可報徳」の九言十二句、百有八字に示されるように、天地人三才の徳に縮めて居る。けだし最初の訓の徳を含めたものと云える。

然し乍ら彼の報徳について詠んだ道歌に「天地の神と皇との恵にて世をやすくふる徳に報えや」「天地の君と親とのめぐみにて身をやすらはん徳を報へや」とあるが、同じく「天地開闢」の項に<sup>(3)</sup>

いにしへは此世も人もなかりけり

高天が原に 神いましつゝ」<sup>(4)</sup>

等あり。彼の神儒仏三味一粒丸とする独特の思想の一端として天地人の代りに天地を天照大神、人を身体の根元としての父母を置き、日本人としての神国観念を似て万物の根元を考え、彼の親に対する至誠献身の生活態度から父母を特に強調し、之に治心の道に仏教をとり入れ、治国の道に儒教をとり入れ、神道を中心とした神儒仏の三者融合の報徳教を説くのである。

## (2) 天祿と分度

かくて彼は人倫を報徳を以て根本となし、その実行のため次の如くのべる。「報徳の徳行を立てんとするには先ず己々が天祿の分を明らかにして之を守るを先とす。而して此内にて勤儉を尽して暮しを立て、何程か余財を譲る事を勤むべし。是道なり。是汝が命にして汝が天祿なり」と教え、自然の天分に從つて作為し度を立てる事この「分度立たざれば徳行は立たざる物と知るべし」<sup>(5)</sup>とさへ云い、分度を守る事を要求する。而して天祿とは何であるかについては、日々の衣食住其他履き物笠傘よりして、鼻をかむ紙迄も皆天祿分内の物であり(天地万物の徳によりて之を使用し、自己のものとなす事が出来るものである。そして祖先の労苦によりて与えられたものである故に)人生尊ぶべき第一のものである。(之を尊ばねば自ら労苦する事なく、その徳を知りえず、よつて恩を感じえず)だから仮物にも我が天祿を賤むの心出る時は(物の徳に対し充分感謝する事能はず。その結果物を粗末にし、所謂一文を啜う者一文に泣くに至る様に物を失い易く)困苦艱難忽に至る」<sup>(6)</sup>事になる。だから天祿の分を守る事がなくてはならないのである。

次に天祿の分内にて勤儉をつくすというのはどのようになすかという事

我という其大元を尋ねれば食うと着るとの二つなりけりであつた。之なければ人間は凌がれぬ身体を持つ故に<sup>(8)</sup>天下の政事も教法も此二つの安全を計る為のみといわれる程である。それは衣食足つて礼節を知るといわれ、衣食の計こそ経済の配慮すべき事であり、それが経世済民の主要事でもあつたから経済と縮められたのである。

而して計は一日の計をたてるのみでは不時の災難もあるやも知れず、一年中同じ日のみは続かないもの、春夏秋冬の移り変りにつれ、収穫も異なれば需要も異なるものである。そこで一年を通じての計算が必要になり、一年の衣食住之にて足るという処を定め、…其終を詳にし、之を天祿の分内に守るといふ事が<sup>(10)</sup>必要になる。人間は過去の経験で未来を案じ明日に備えて「今日の物を明日

に譲り」<sup>(11)</sup>「貯蓄する」<sup>(12)</sup>。茲に人の禽獸と異なり、人の人たる所以がある。

然し乍ら何故その分を守らねばならぬのか。宵越しの金を持たぬ様では困るが、分度外を積む事なく使つてもよさそうではないか。けだし分度を守る事は明日に備えて一身にとつては世を穩かに渡るの術であり「麥ありと雖も万の事有余無ければ必ず差支出来て、家を保つ事能はず」<sup>(13)</sup>なるからであり、之を大にしては「国天下を保つ事能はぬ」<sup>(14)</sup>に至るからである。この時是を補うの道あれば<sup>(14)</sup>変なきが如しであり、分度を守つて儉なれば<sup>(14)</sup>変に備えうる事になる。そして一身上のみならず「世を救い世を開く」<sup>(15)</sup>をうる。「只謂れなく儉約するに非ず、用いる処あるが為のものであり、富国の術である。」<sup>(16)</sup>

かかる儉約は天明の大飢饉にあい、定信による寛政の改革に於て大いに強調された事であつたが、そこには半円の見に捉われる偏のため、一円融合の人為の倫理に徹底せず、報徳の観念によらぬ形式的のものであつた為庶民は却つて之を苦痛に思い「濁れる田沼の昔ぞ恋しく」思われるのであり、次の天保の改革もよく公私共の生活難を救いえないものであつた。茲に本を立てる個人の自覚決意こそ先決条件である事の啓蒙徹底こそ民主々義ならぬ昔に於ても不可欠なるは言を俟たぬ事であり、教育の本質もそこにある事を痛感させられるのである。

かく分度は儉なるにより「先人今日の物を明日に譲りたる」<sup>(17)</sup>「前代の人<sup>(18)</sup>の骨折」の結果、今の我は過去の父母ありて人道も勤めうるのであり「夫譲は人道也」<sup>(19)</sup>といえるのである。

その儉の程度については「衣は寒を凌ぎ、食は飢を凌ぐのみにて足れる物、其外は無用の事、飯と汁木綿着物は身を助く其余は我をせむのみなり」<sup>(20)</sup>となし、極度の儉を説き、衣食の限界は寒を凌ぐ程度の身体の保護と飢を凌ぐ程の飯と汁さえあれば足りるとなすのである。

そしてその余は「我をせむ」人道を勤めんとする我にとりては差支えを生ぜしめるものとなる。即ち分度を過し「富貴安逸を好み」<sup>(21)</sup>「奢侈を欲する事から利を貧るの念を増長し、自然欲深くなりて吝嗇に陥り、出すべき処をも出し惜しみ、亦利を貧る余り善悪の心薄らぎ、夫より知らず知らずして職業も不正になりゆきて災を生ずる」<sup>(22)</sup>事になるからである。かくて奢侈は「不徳の源滅亡の基」となる。又当人とつては遊樂其他に耽るならば、何事も習い性となり、面白き事もなくなる。

之を歴史的にみても、亦現代の社会情勢からみても、国家の榮枯盛衰の岐路となるは、文化盛になり、それに加えて奢侈に進む時は遊惰となり気力衰え利己一身の計にとどまりて社会の団結強固ならず、<sup>(23)</sup>質実剛健粗衣粗食に耐えたる者支配階級に替られる例多し。



又支配階級の有閑的存在の為に搾取され、奉仕の生活を強いられる多くの悲惨なる民衆あり、近代市民社会の文化も資本主義の発展に伴い、物質的機械文明の面多くなり、貧困、犯罪、天災等の増加は社会問題として、社会の不安を激化しつつあり、シュヴァイツァーをしていwashむれば「今日迄世界の文献で文化とは何であるかと提起したり、之に解答した例は見当らない」程であり亦「生存競争が弱まり」どころでなく「精神<sup>(24)</sup>の萎縮が始まり、文化の自滅作用が進行している」とさえ云われるのである。現在のレジューブームの影に資本家の売らんかなの宣伝の為にマスコミ、マスプロが一部の数の人々に利用され、大衆は流行に踊らされて、社会成員の連帯責任の下に人為の勤むる風は益々薄らいで行く事が懸念せられるのである。

かく儉ならざれば一身上滅亡の基となり、又社会的にも人身の辯道は弘まり、人道は狭められて行く。かくて報徳溯源道は「分度を定むるを以て本となし、富国安民の法も分度を定むるの一つである」という事によつて、衣食住の充足をはかる経済も、徳に報いて天禄の分内を守り儉をはかる徳を以てする。経済即道德の活動に上昇し、天人一如の敬虔にして謙虚なる行道と化して行く。

しかし尊徳の之迄の分度は一般の原則それも個人を個人としてみて天禄の分を守らしめるものであつた。之を社会的実際的に見る時どういえるであろうか。

すべての人は個人的には生命維持に必要な衣食住は最小限度に於ては大差ない筈である。しかし現実的には経済的社会的文化的発達に諸段階からみて違いがあつたし、亦今後もありうる訳である。所謂 W. ロシヤの分類による生存欲と応分欲との開きである。個人の分度も押しつめれば飯と汁になるうが、現実の社会に於て各人をそこ迄押しつめ固定する訳にはゆかないものである。当時の封建制度の下に於ては尙更である。士農工商による生活程度の制限、同じ武士階級に於ても身分差による格式の違い等あり実際的には貧富階級はあれど、形式的には身分に応じて当然とされ無理をせねばならなかつたのである。封建社会の崩壊期における支配階級の困窮はその支配する農村の疲弊を更に悪化させ、都市農村共資本主義経済の発展の下に没落しつつあつた。しかも封鎖的藩幕体制の下、孤立的な自給自足経済が主であつた。かかる情勢下での分度は当然固定的たりえず、各々国情により村勢により分度は立てざるべからざるものであつたから「されば貧富は一村の分限を以て論ずべし。其分限に依ては朝夕膏粱に飽き綿繡を纏うとも玉堂に起臥するも奢にあらず。分限に依ては米飯も奢なり。……漫に驕儉を論ずる事勿れ、……一村一国の全収入の平均を中として貧富増減大小をきむべし」と極めて保守的否迎<sup>(27)</sup>

合的ときえみえる言辞であるが当時にあつては現実的であつた。だから富者の贅沢も非難すべからず、階級闘争の考えも起りえないとも云える。

しかし彼は持前の人の道を忘れはしない。たとえその分度高くとも之を最小限度に保てば、その人の価値は高くなる。内面的には儉は益々儉がよいのである。「米は多く蔵に積んで少しづつ炊き、衣服は着らるゝように拵らえてなる丈着ずして仕舞いおく」という風に対他の社会的に益々多く譲り、社会一般を富まして儉の徳は完成される。<sup>(28)</sup>

そして富者は儉なるにより不貪、推譲の気持が加わる事により、人道を勤めれば、富者自身怨を買わず安泰永遠に保持する事にもなるのである。清教徒が右の手で稼ぎえた金を神の思召しにかなうために一部を推譲して社会に寄附し還元させる処に資本主義社会が維持されるゆらきがあると考えられる様である。

かくて貧は貧として自らの分度に従い自力更生自己主義の道を歩ましめ、富者を羨やみ富者を倒す争闘の巷を歩ましめず、富者は儉と勤を以て益々譲の人道を歩ましめんと、両者保全の道を説き、即物的科勞的でありつゝ一円全体主義の人為の道につかしまんとするのである。

### (3) 勤 勞

かく一己一己の分度に従つて生活するも、更に勤苦勤める事により、人の道を歩ましめんとするのであるが、それにつき次の様に語る。「若き者は毎日能く勤めよ。是我が身に徳を積む也。怠りなまけるを以て得と想はるは大なる誤りなり。徳をつめば天より恵ある事眼前也」<sup>(29)</sup>と。

天よりの恵とは「富貴天に在り、己が所行天理に叶う時は求めずして富貴の来る意也」をさす。しからばいかにして「天理に叶う」となすかと云えば「一刻も間断なく天道の循環する如く日月の運動するが如く勤めて息ざるを云う」のである。かく「此身食」の人間は衣食住に便なるを増殖すべく「一途に勤むべき事を勤め」「小事を忽にせず」<sup>(31)</sup>勤めて行くならば、積小為大の原理に叶い、日暮夜明けて循環する如く、天理に叶い、求めずして大事はなるといわれるのである。<sup>(32)</sup>

### (4) 開闢元始道——清淨心、仮の身、不動心一

尊徳は勤勉力行以て人道を尽くすべきを説くが、之を促進せしめる秘訣を説く。

#### 1. 清 淨 心

「葦原に我一人天降りしと覚悟を極むれば、依頼心なく卑怯卑劣の心もなく、何を見ても浦山敷き事なく心中清淨なるが故に願ひとして成就せずと云事なし」と何もなき処に裸にて生れ来たものと思ひ、己生きるためにつ<sup>(34)</sup>

くすのみで、他への依頼心も起りえないのであり、かかる未開発天地開闢の境地に立つならば、天禄は思いの儘にわか物となしうるのであり、他人は他人、自己のなすべき事を勤むるのみ、他人を当にする勿れである。常に始に反り無心になる事である。

## 2. 仮の身

かく卑法卑劣の心なく、依頼心なく心中清浄となれるその上に、釈氏の生者必滅の理により「人と生れ出たる上は必ず死する者と覚悟し、一日活れば一日恩になり天の御影を受けるのであるから、それだけ儲となし……此世は我人ともに僅の間の仮の世なれば、此身は仮の身なる事明らかであるから、

かりの身を元のあるじに貸渡し

民安かれと願ひ……我身と思わず、生涯一途に益ある事こ（我の一字を去り）勤めるならば、無物無尽蔵、心身一元、空を悟り此身を天に還さんとして元の主に此身を少しづつ用い返借、以て天恩に報いる報徳溯源にして、且開闢元始の道を歩んでいるのである。

## 3. 不動心

さて次に必要な事は清浄心もて始め、一日一日仮の身と思うたなら「一心を決定し、心を動さざる事不動尊の如く」<sup>(35)</sup>なければならぬ。尊徳は「今日に到るも不動心の堅固一つにあつた」<sup>(36)</sup>からと語る。

而して勤惰による貧富必然の因果の妙なる「一刻励むれば一刻丈け、一時働けば一時丈……善悪邪正曲直皆計算の如く少しも狂いはない。」<sup>(37)</sup>然し乍ら「今日蒔く種子の結果は目前に萌さず、目前に現れずして十年廿年乃至四十年五十年の後に現る物であり。世の中万般の事物元因あらざるはなく、結果あらざるはない」<sup>(38)</sup>。天地の運行がしかる如く人生界に於ても善因あれば善果あり、因果応報の理は歴然である。之によつて善因を積む勤を勤めねばならぬ。すべて「貧となり富となるも偶然に非ず。富も因て来る処あり、貧も因て来る処あり」<sup>(39)</sup>。しかし乍ら人間により予測し得ざる、又その因を認識しえざるもの例えば病とか天災による貧も「道の行るゝ行れざるは天なり……天地間の万物の生滅する、皆天地の命令により、私に生滅するに非ず」<sup>(40)</sup>を知らず、天理に逆いての人為の結果である。この点ゲーテやシュヴアイツァーの自然観と通ずるものあり、「探究しえざるものは自然を敬虔に敬うとか、自然は常に厳粛であり、真実である。すべての誤解は常に人間の側にある」<sup>(41)</sup>と似て、天地自然に任せるのである。

## (5) 推 讓

かく分度を立て此内にて儉もて明日の為又後世の為余剰を遺す事を勤め勤めて、報徳溯源開闢元始の道を毅然として進むのであるが、勤儉は揃つて余剰は積重ねられ

それを利他の讓とする事により、儉は吝より解放せられ、亦人事を以て燈心を細くする時夜半にして消ゆべき燈も曉に達するという風に、消費を縮減する事は天命を伸ばす事になり、己は勤讓一如の徳を得、他人には感謝の念を起さしめ、物徳はより多くに及ぶ事になる。勤も儉讓を加えるにより社会的となり利他となる。かくて両者は一円全体仁の大道を全うしうる事になる。茲に分度、勤苦、推讓の三者揃う時人道全しといわれる事になる。

尙推讓は之を受ける者に感謝の念を起さしめる事が前提であるとして語る。「財を抛つに受ける者其恩に感ぜざれば益なし。……（与える者）自謙して驕らず、約にして奢らず、慎んで分限を守り、余財を推讓の時、受る者勤勞を厭はず、粗衣粗食を厭はず、分限を越すの過を恥ぢ、分限の内にするを樂とす。」<sup>(42)</sup>かく己の心構え、行い正しからざれば、与える者受ける者に羨ましく思われ、その行いを有難く思うのでなければ、そして受ける者が分限内に暮す気を起す為の慮でなければ、即ち「己に克て礼に復す」<sup>(43)</sup>自力更生の自覚と意気なくんば、天下仁に帰し難しであり、物を与えても本人の為にも社会の為にもならないというのである。物を与えるも道徳、宗教が中になくは本末顛倒といえるからである。経済と道徳の一致による物徳開発であり、人造りである。

而してこの推讓は「己は損すとも人には損はかけじ」と心掛け「己を捨て人に隨う」<sup>(44)</sup>に至りて「道徳全く……<sup>(45)</sup>百事行はれ難き時に立至るも行はる」と説くが、何故他人を自分より先にし、自己より重しとなさねばならぬのであろうか。

我身を犠牲にしての務は「他人一人類全体の、或は人類の集会的利益の制限内の個人の幸福若くは幸福の手段への奉仕」<sup>(47)</sup>であり、「何人かゞ自分の幸福を全然犠牲にする事が出来るというのは、世界の秩序の極めて不完全な状態に於てのみ生ずる事であるけれども、世界が現在その不完全状態にある間は。かかる犠牲は人間の中に見出される最高の道徳である。」<sup>(48)</sup>といわれるが、自律的な義務観よりも宗教的な報徳観から自己を捧げ捨身の行に出る方が容易である。

しかも尊徳は「入るは出たる物の帰るなり。来るは押し譲りたる物の入来るなり。」と湯船の湯を手にて己の方に揺くも却つて湯向うの方へ流れ帰り、向うの方へ押し時は湯向うの方へ行くが如くなれども復我方へ流れ帰る例を引き「奪うに益なく讓るに益あり」<sup>(50)</sup>と天理に違はざる結果は損にあらざる益なりと云い、犠牲の意味は薄らいでしまう。犠牲による推讓の利他的行為は人の心を感動させ、推讓行に融和させられ、共に一円仁の世界の中には入つて行く事になり「国家経済の根元」<sup>(51)</sup>となり、経

濟即道德の人道が開かれるのである。

- (1) 第一卷P 269~275、井口丑二、大二宮尊徳 P 383~393
- (2) 第一卷P 275金毛録、第一卷P 123は形容字句やゝ異なる
- (3) 第五卷 P 338
- (4) 第五卷 P 340
- (5) 夜話百二八
- (6) "
- (7) " 百二九
- (8) " 百十六
- (9) " 二二七
- (10) " 百六五
- (11) " 七九
- (12) " 十六
- (13) " 十三
- (14) "
- (15) "
- (16) "
- (17) " 七九
- (18) " 二百五
- (19) " 七九
- (20) " 百二五
- (21) "
- (22) " 二百六
- (23) イブン・ハルズーン、歴史、藤原氏、平氏、室町幕府、化政文化等例多し遼金ローマ帝国も同様
- (24) シュ全集第六巻 P 236 文化の倫理的な基本性格
- (25) 紀要P 10 倫理的人格の倫理と社会倫理の項
- (26) 夜話百六五
- (27) " 七八
- (28) " 十七
- (29) " 二百五
- (30) " 八六
- (31) "
- (32) " 二二二
- (33) " 一四
- (34) " 百三四
- (35) " 七五
- (36) " 五十
- (37) " 四七
- (38) " 百十九
- (39) " 百二一
- (40) " 六十
- (41) 紀要P 2、P 4

- (42) 二二四
- (43) 二二五
- (44) " 百四三
- (45) " 二十
- (46) " 百四三
- (47) J. ミル、功利主義論 (社会科学大系、波多野訳 P 309)
- (48) " P 308
- (49) 夜話四十
- (50) " 三八
- (51) " 十七

## (六) 日常的世界の倫理

以上に於て人倫はいかにあるべきかに就きのべてきた。然し乍ら之等の人は男、女であり親子兄弟等の間柄をなす共同態の一員である。之等の間柄における倫理は何か。

### (1) 男女の道

尊徳は人間が独身である事を非とし、夫婦の道の自然を説く。

「凡万物皆一つにては相続は出来ぬもの、人倫も其如く男と女とを結び合せて相続する物也。只人のみならず動物皆然り」それ故「陽を保つ物は陰也。」男無ければ女無し。女なければ男なし。夫婦の道も男の氣と女の氣が陰陽二極間を往来せる姿であり「下へ入つては上に出、上に出ては下に入る」風に男女一円をなす。男あつて女あり、女あつて男があるものであり、男も女も半円、兩者相俟つて子孫あり、人倫は実現されるものである。

又女大学の論に男子大学を説なべからずとか、親は慈愛、子は孝行各々己が道を違えざれば天下泰平也。之に反すれば乱也というのも、静止は天理に背き退歩であり、体に即し氣の遍を求めぬ時は一円融合はなされず、よつて完全ではない。男は男らしくする事に徹する事により、女は益々女らしくする事によつて、一円男女結合は固し。然るに男己が道を忘れ、妻を己に仕えさせ、婦道の至宝たる女大学の通りにあれと要求して、己は男らしくする事によつて、相手に自己を捧げ自己を棄却して偏倚の極一円融合の愛に徹しようとしなければ女子には立つべき道なきが如く思われるだけで何にもならずましては己を推して尽くす心なく、他にのみ奉仕を要求しても、女子之によりそれを愛し、よつて幸福を感じずる事はない。それは只薬の処方を知るのみと同様、薬は病なければ不要であり、男女和合一円に変あり、關係異状あらば回復の処方を対偶半円の己先ずなすべきであり、そ

れよりも病ましめざる様、己より偏倚を極める様努むべきである。

妻も亦同じ。妻は何処迄も妻らしくあらん事を願い、夫と一心同体たらん事に努め偏倚すれば、一円男女と遍し融合なり、夫悦び妻悦ぶ両全の道は実現されて行くとなす。

## (2) 親子の道

然らばこの二人結合より生ずる三人結合である親子の関係は如何。亦一円融合親悦び子悦ぶ一円慈孝あるのみである。人は世話をうける故世話をせねばなるぬ。まして男女相続して生れたるに対して「世間親たる者の温情は子の為に無病長寿立身出世を願うの外決して余念なき物」であるのが普通である。然し乍らそれ罷迄して親の子を育てる、「子無頼となると雖も養育料を如何せん。子の不幸も我身なき物と覚悟すれば、一日活れば一日の儲」と覚悟しやすく、只親としての務を果すのみ。「親には親、子には子の教あり。道を違えず親は慈愛、子は孝行を道とすべし」である。子としては子の道、孝行は「親の心を以て心とし、親の(子を一途に思う)心を安んずる様」「気に入る様心力を尽し」「平素の身持心掛随にし……いい事あらば親我子ならんと思ひ悦び、罪科を受けし者あらば必我子にあらじと、親苦慮せざる程なれば孝と云べし」といい、「親の方に偏倚極りて(親の心を心とし、親の心を安んずる様尽くして)至孝」といい、人々力の限り、百石は百石、五十石は五十石、親子にて一円の間柄に於て「子の偏倚を極めて、親醜に在て忍び雖も争はず堪忍して」至誠報恩に当るべきが至孝であるとなす。茲によし親親たらずとも子は子として親に仕え、親子一円仁に献身還帰すべしと説く様に考えられる。

兄弟嫁姑に於ても同様「自ら省みて」誠をつくし、先ず譲りて「堪忍すべき」処に人道があり、之を勤むべしと説くのも、譲るに益あり、道は実現されると信ずるからである。

## (3) 世渡りの道

然らば家を一步出て隣人に対しては如何。「貪心争を起ししやすい世間にも人界の筋道たる礼法によらざれば人の道は立たず。譬えば碁盤、将棋盤に筋あるが如し」「交際(15)は人道の必用」であるから、上にある者はそれを相手に知らせ不安を抱かせる事なく「先(16)の人の力と相応する程にして、己富且才芸あり学問ありて、先の人貧ならば富を外すといった具合に、」「又己劣れりと思う者は相手に幾目も置て交際すべきである」という。

かく劣れる者は劣れりとして、優れたる者に対し敬意を表し、その点に於ては私なく従う。優れる者亦自ら之

を誇り、相手を軽蔑し劣る事なければ、之人と隔て心あり心通わず、一円全体的見地から自他融合の為には、交わるに人にあわせんとの気持なかるべからずである。相對対立は半円の偏也故である。

しかし人と交わるにも「世話をやき過て人に厭われる」に至つては何にもならず、何時も劣れる人を思いやり「己が心にて己が心を戒め、己聞かずば人に説く事なき」様心掛け、その上「誠心を以てし、善人を挙げ直人を挙て諸の曲れるを措くという如く、又口で云わず自分道を踏で善人を多くして善に傾けしめるという風にしななければならぬ」又「恨に報うに直を以てす」の精神でつくすべきで、(20) 況んや「人の過を顕すは悪事、人を誹るは宜しからず。人の忌嫌う事は云事勿れ、人を誹るは不徳自禍の種子を植るなり、(21) 慎しむべし」と云う。誹りも顕すも当人改めるに非ざれば甲斐なき事、却つて世に知らせ当人の反感を買い、亦云う人の傲慢不遜或は直接当人を改めるを怠り、卑怯を示すのみで禍を招く因となる。報徳以德こそ人道である。

## (4) 士道論

封建社会の支配階級たる武士については「君往臣来、臣往君来、君臣往来、不止不転。…君臣輪廻不止不転、貴賤輪廻してと万物一円鏡に述べる如く、一元相對 君なれば臣なく、臣なれば君なし、と相依相對するものであるが、「武威の政治無くんば国家平治せず、農民の耕耘無くんば次年の衣食無し」という風に、士は「諸人の邪正の元を業として 正し尽くさん 幾代経るとも」の心が士孝行であり、士の偏も「士徳に報ゆる無ければ、日夜士徳を失う」という風に、臣は至忠、君に偏倚して至きものとなり、「自分道を踏で己が家を仁にする」様努めるべきである。

又君たる者民に悪しき事あらば、政事あらくして行届かざる故と歎き人民の米糧を重んじ黎民飢ず寒えざる王道を一途に勤むるのみと説き

「人の上に立つ者は勤儉下をして養ましめる事なき様慎しみ」「美服美食は秩序の為のみ」に限り、一心不乱に民の父母たらんと努めるべきであると説く。

## (5) 職分論

社会には身分職業の違いあり。産物も処によつて異なるのであるが「海には海の利あり。山には山の利あり。天命に安んじて其外を願う事は愚かな事で、他を羨むべきではない。此国は此国の人(31)の止る処、其村は其村の止る処」と現実の身分職業に対し先ず己の持場を固く守り充分動かざる事を説く。一般的には遠近も己々の住処にぞありで、まして当時の社会制度の下においては、時代の制約もあり止むをえぬものである。しかし石の上にも

三年という如く、不動心の堅固が成功の因になる事は変りない事と云える。

商人も「諸人の有無の元を業として運び尽さん幾代経るとも」とその分を守りてこそ「売買の二つの恵なかりせば何国の果に咲やこの花」と商恩を謝されるのであり、買者ありての売者であるから「己が利欲のみを専として買人の為を思わず猥りに貪らば其店の衰微眼前なるべし」と云えるのであり、各職業他者ありて一円をなす様、その分を守り、他に事える事が自他兩全の道であると、社会分業に就て説くのである。

## (6) 富 貴

富貴に就ては次の如く戒める。「世人凡俗の通病にかかりて富貴を求めて止る事を知らざれば、已絶頂に在つて猶下を見ず、上のみを見るは危し」何故ならば「先祖の余蔭先人のお蔭を有難しと思わず、眼下の者を憐む事を知らず、己を利せん事のみを欲し讓る事がなければ、下の者如何で貪らざらん。互に利を争はゞ奪わざれば飽かざるに至り、禍の天因、秩序の破壊となる。」からである。

之に反し止る処を知り、多少を論ぜず後來に譲つてこそ、富貴も永遠に維持しうるのであり、報徳の教こそ夷政者の永安の道なりと云えるのである。

## (7) 農 本 論

尊徳が天地の間にある人間として、天地の道に従いつゝ、人間界に於て「親子の道、夫婦の道と共に、兩全の道、世界の中法則とすべき四つの道としてあげたのは農業の道であつた。」争の因は食の為であり「重んずべきは人民の米糧」<sup>(39)</sup>「食を以て呼ぶ時は速に來る」程のものである。「自然を利用する事を始めた最初の仕方は農であり」それは「自作つて食ひ、自ら織つて着るの道（であるから）此道は一国悉く是をなして差闕なき業」である。そして農は相手の自然物たる土地やその生産物たる植物にとつても、生々の徳を人間によつて生かして貰う事によつて悦ぶべきで「相共に苦情なく悦喜の情のみ」であるから兩全、すべてによいのである。

しかも農業は「鍛錬の鍵を以て此地上に取出す増殖の道（であり）天地の化育を贊助する大道」<sup>(44)</sup>で、一円全体の恩徳に報ゆる人道の具体的手段である。故に「腹くら（喰うて）つきひく女子等は仏にまさる悟なりけり。この人道必用の悟のみで人間は事足り、悟道者流の悟りは悟るも悟らざるも、知るも知らざるも共に害もなし益もなし」といふ。何となれば「道は書物にあらざりて行いにある」<sup>(45)</sup>からであり、又「至道は卑近に有し高遠に非ず」<sup>(46)</sup>であるからである。然るに「根元たる物は必卑し

き物也。家屋の如き土台ありて後に床も書院もある如く、土台は家の元也。民は国の元、諸職業中農を以て元とす。卑しとして根元を輕視するは過、其元を厚くし其本を養うべきで、其の本衰うる時は枝葉を伐捨て根を肥すぞ培養の法」とし、重農思想を説き、彼の生涯を農村復興に捧げたのである。

## (8) 荒蕪開発の道

天地の運行から天道自然を見出し、之を一円空とし、之に則り人道の自然を一円仁となし、之を勤めて以て物心開発、天人相即を説き、一切我の我身の天に帰るを説く尊徳は開闢元始、報徳以徳の態度で、そのために「世の中に無用の物と云はあらず。我方法は天禄を授け、天禄の破れんとするを補ひ、天禄の衰えたるを盛んになし且天禄を分外に増殖し、天禄を永遠に維持するの教なり。万物不浄に極まれば必清浄に帰り、清浄極まれば不浄に帰る。寒暑昼夜の旋轉して止まざるに同じ。夫農学は不浄を以て清浄に替るの妙術也。我方法又然り。荒地を熟田に帰し、借財を無借になし、貧を富になし、苦を楽になすの法なり。」<sup>(48)</sup>「世の中捨てるにあらずして廢れて無に属するものを拾ひ集め、国家を興す資本とせん」<sup>(49)</sup>と勤めるのである。

捨てるに非ずして無き物とは何か。曰「第一に荒地、第二に借金の雜費と暇潰し、第三に富人の驕奢、第四に貧人の怠惰」<sup>(50)</sup>であり、「智あり才ありて学問もせず、国家の為も思はず怠ける、身体強壯にして業を勤めず怠ける者、是自他の為に荒蕪也。世の中の為最も惜しむべき荒蕪なり」とし、之等の荒蕪を開くを以て我教なりとなすのである。

## (七) 結 び

農村より出、農村の救済復興に一生を終つた二宮尊徳は寸暇も休む間なき活動家であつたと共に、その活動の根底には広く天地自然の運行から即物的に学び取りたる認識の下に、至誠と実行を尊ぶ天人一如、天人一貫の報徳の思想体系を確立した獨創的哲人であつた。そして天理に則る故天地間にある鳥獸蟲魚草木すべての徳を生かし繁榮させる人道の行者であり、又天理自然に則る故米つく普通の女子等にも仏にまさる悟りを持たせる平易な民衆の倫理の普及者でもあつた。彼の偉大さはこの綜合一貫せる思想と実践にあるのであるが、彼の報徳の為の事業たる報徳講、行政仕法に迄述べえなかつた。又彼の学問論、儒教仏教に対する批判については後の機会に述べる事にして、与えられた紙数を遙かに越すものとなつたが、序に記した如く、尊徳の思想を出来るだけ忠実に述べんとして重複冗長になつた憾みを感じると共

に、強靱な尊徳の構想力に驚嘆し、接する程偉大なるを痛感するのみである。

- (1) 夜話百五八
- (2) " 百六十
- (3) "
- (4) 百五五
- (5) " 百八三
- (6) " 十
- (7) " 百五五
- (8) " 百八三
- (9) " 七四
- (10) " 百八三
- (11) " 百八七
- (12) " 百八三
- (13) " 百五六
- (14) "
- (15) " 百七九
- (16) 百七八
- (17) "
- (18) " 三三
- (19) " 三七
- (20) " 三九
- (21) " 四九
- (22) " 九十
- (23) 第一卷 P 214, 217
- (24) " 金毛録、上下貫通弁用之解 P 117
- (25) 第五卷 P 365
- (26) 第一卷、報徳訓、P 273
- (27) 夜話三九
- (28) " 五一
- (29) " 百三六
- (30) " 百二五
- (31) " 八二
- (32) " 百二五
- (33) " 九、八十
- (34) 第五卷、三才独楽集 P 365
- (35) "
- (36) 夜話四十
- (37) " 八十
- (38) "
- (39) " 四二
- (40) "
- (41) 佐藤寛次、日本農業通論 P 2
- (42) 夜話百四二

- (43) " 四二
- (44) " 百十七
- (45) " 百十六
- (46) " 百七四
- (47) " 百四一
- (48) " 百二九、二二〇
- (49) " 九一
- (50) "
- (51) " 九二